長野県中野市

安源寺城跡遺跡発掘調査報告書

1999.3

中野市教育委員会

刊行にあたって

本報告書は平成10年度上水道の貯水槽建設に伴う埋蔵文化財の事前発掘調査の報告書である。

安源寺城跡はその名のごとく、中世の山城である。戦国時代に活躍した有力な北信地方の武士、高梨氏によって残されたものと言い伝えられている。

今回、やむ得えず、その一部を記録保存することになった。当初は山城遺構のみと考えられていたが、調査の結果、山城の遺構のみならず、弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓が発見された。弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓はこの地域の古墳時代の始まり方を考えるうえで重要な発見であった。

このような大きな成果を得ることができたのは、ひとえに関係諸機関や市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解とご協力の賜物であります。事前調査の実施とその成果を報告書として刊行できましたことにつきまして、関係各位に心より感謝申し上げて、刊行の言葉にいたします。

平成１１年３月

中野市教育委員会

教育長　小　林　治　己

例　言

1　本報告書は平成10年度高丘地区上水道貯水槽の建設に先立ち実施した埋蔵文化財の発掘調査報告である。

2　調査は中野市教育委員会が実施した。

3　発掘調査は市学芸員徳竹雅之の統括のもと、調査員関武が中心となって進めた。

4　報告書は第１～５章を調査員関武、第６章を市学芸員中島庄一が執筆した。

目　次

第１章　地形と位置……1
　第１節　地形と位置……1
　第２節　周辺遺跡……4
　第３節　安源寺城跡遺跡……4
　第４節　調査区について……7

第２章　弥生時代の遺構……11
　第１節　第１号前方後方墳丘墓……11
　第２節　第１号前方後方墳墳丘上に認められた土抗（主体部）……12
　第３節　２号前方後方墳丘墓……15
　第４節　第２号前方後方墳墳丘面上の落ち込み状遺構……16
　第５節　その他の遺構……17

第３章　平安時代の遺構……17
　第１節　埋甕状遺構……17

第４章　その他の遺構……17
　第１節　土抗……17
　第２節　溝……19

第５章　中世土塁状遺構……19
　第１節　調査経緯……19
　第２節　第１号土塁……22
　第３節　第２号土塁……22
　第４節　帯状テラス……24

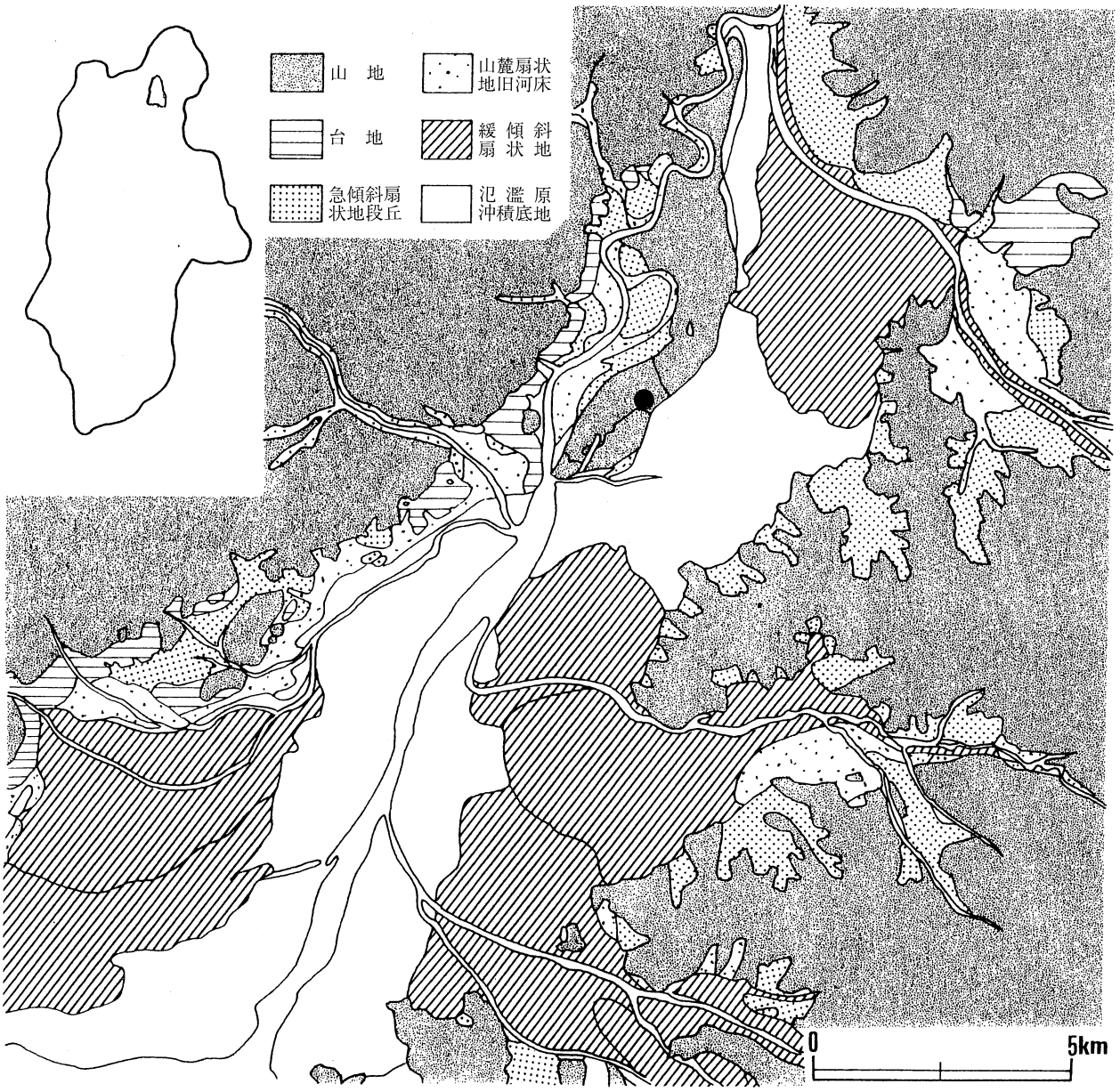
第６章　遺物……24
　第１節　旧石器時代の遺物……26
　第２節　弥生時代の遺物……26

第１章　地形と位置

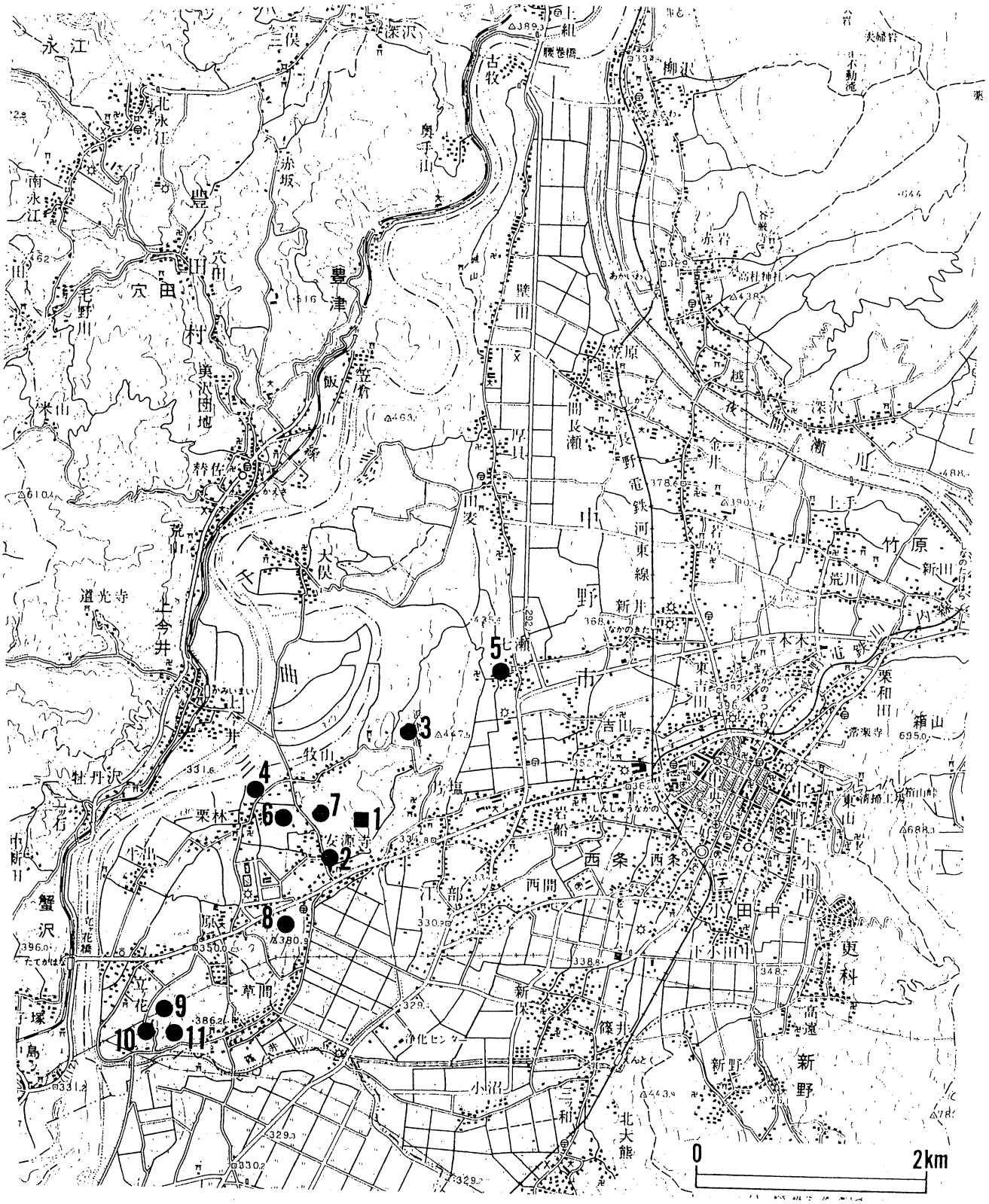
第１節　地形と位置

今回、調査を実施した安源寺城跡遺跡は長野県中野市大字安源寺地籍に所在している。中野市は長野盆地の最北端に位置し、長野盆地の北に位置する飯山盆地と隣接する。

長野盆地はいうまでもなく中部高地最大の盆地であり、南北に長い紡錘形を呈し、ほぼ



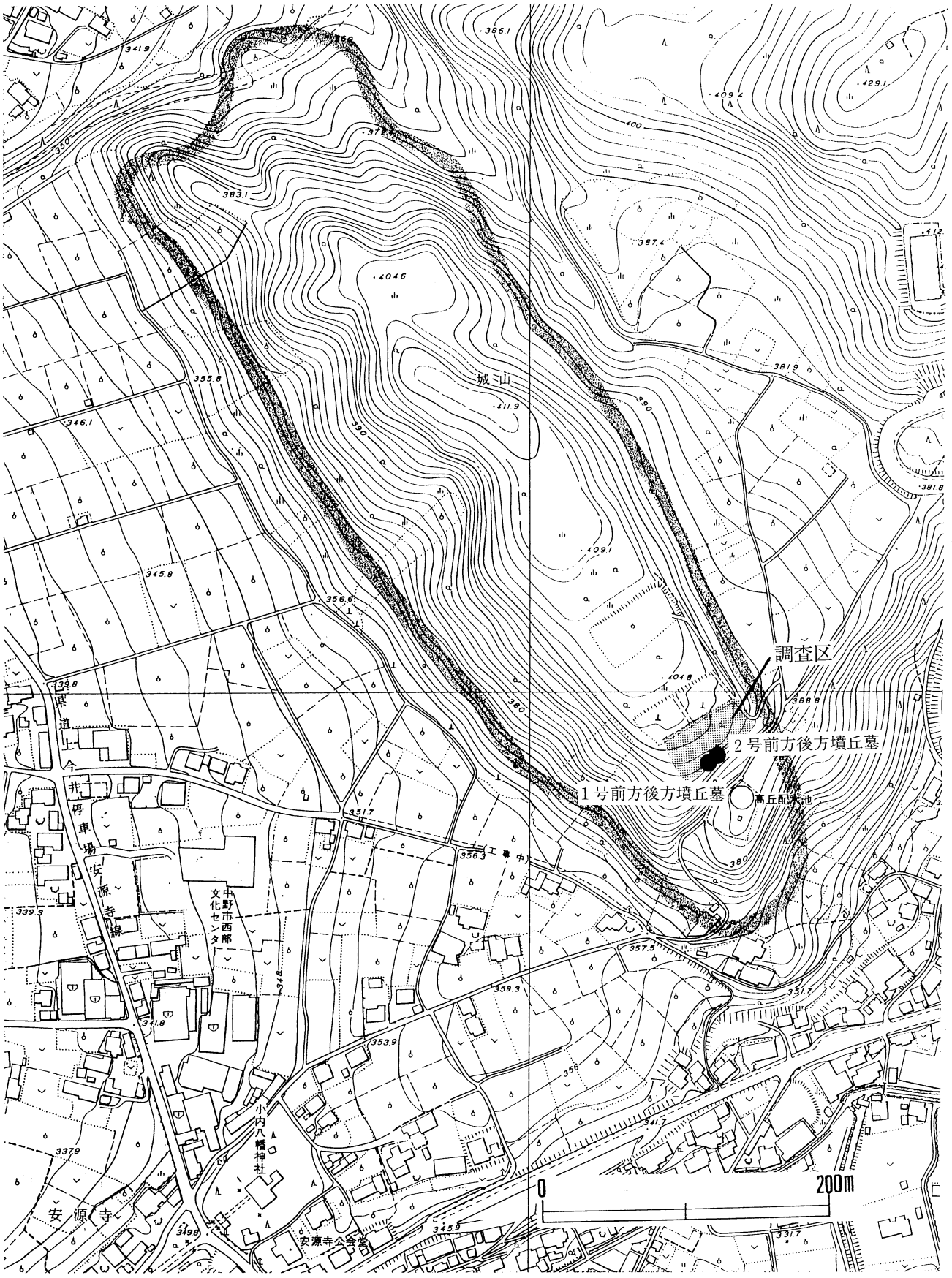
第１図　遺跡の位置（１）



1 安源寺城　　2 安源寺遺跡　　3 浜津ヶ池遺跡　　4 栗林遺跡　　5 七瀬遺跡

6 安源寺館跡　　8 茶臼峰砦遺跡　　9 沢田鍋工遺跡　　10立ヶ花表遺跡　　11がまん渕遺跡

第2図　遺跡の位置（2）



第3図　遺跡の範囲と調査区

中央を千曲川（信濃川）が北流する。盆地の東西を画する山地は西部山地、河東山地と呼ばれ、新潟・群馬県との県境となっている。盆地低部には自然堤防と東西の山地から流入する河川が形成した扇状地が発達する。中野市の大半は長野盆地の最も北に位置する扇状地（中野扇状地）上に位置している。

中野市の地形は大きく山地、扇状地、盆地低部、丘陵部に区分される。東の河東山地から流れ込む夜間瀬川が形成した扇状地地形が市域の大半を占め、扇状地の先端は西部山地の裾部に形成された高丘・長丘丘陵に接している。

安源寺城跡遺跡は高丘・長丘丘陵上に位置している。この丘陵は盆地北西縁部を形成し、千曲川を挟んで、西側の豊野、赤塩、奥手山丘陵へと続く。高丘・長丘丘陵は西部山地裾部の丘陵である豊野、赤塩、奥手山丘陵と千曲川によって分断され、盆地低部に向かって伸びる半島状を呈している。

この盆地低部に半島のように突き出す高丘・長丘丘陵の先端部は標高350m前後の緩やかな丘陵であるが、先端から約2.9km程奥に入った地点で、尾根を横断する急峻な崖をつくって一段高くなる。安源寺城跡はこの一段高くなる丘陵部分の山頂部に位置する。山頂部は丘陵の方向に直交する（北西から南東）ように、一段高く、北東側には小さな谷が形成されている。

第２節　周辺遺跡

周辺には旧石器時代のがまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡、浜津ヶ池遺跡、弥生時代から古墳時代の安源寺遺跡、栗林遺跡、七瀬遺跡、中世遺跡として安源寺館跡、安源寺跡、茶臼峰砦遺跡などがある。

第３節　安源寺城跡遺跡

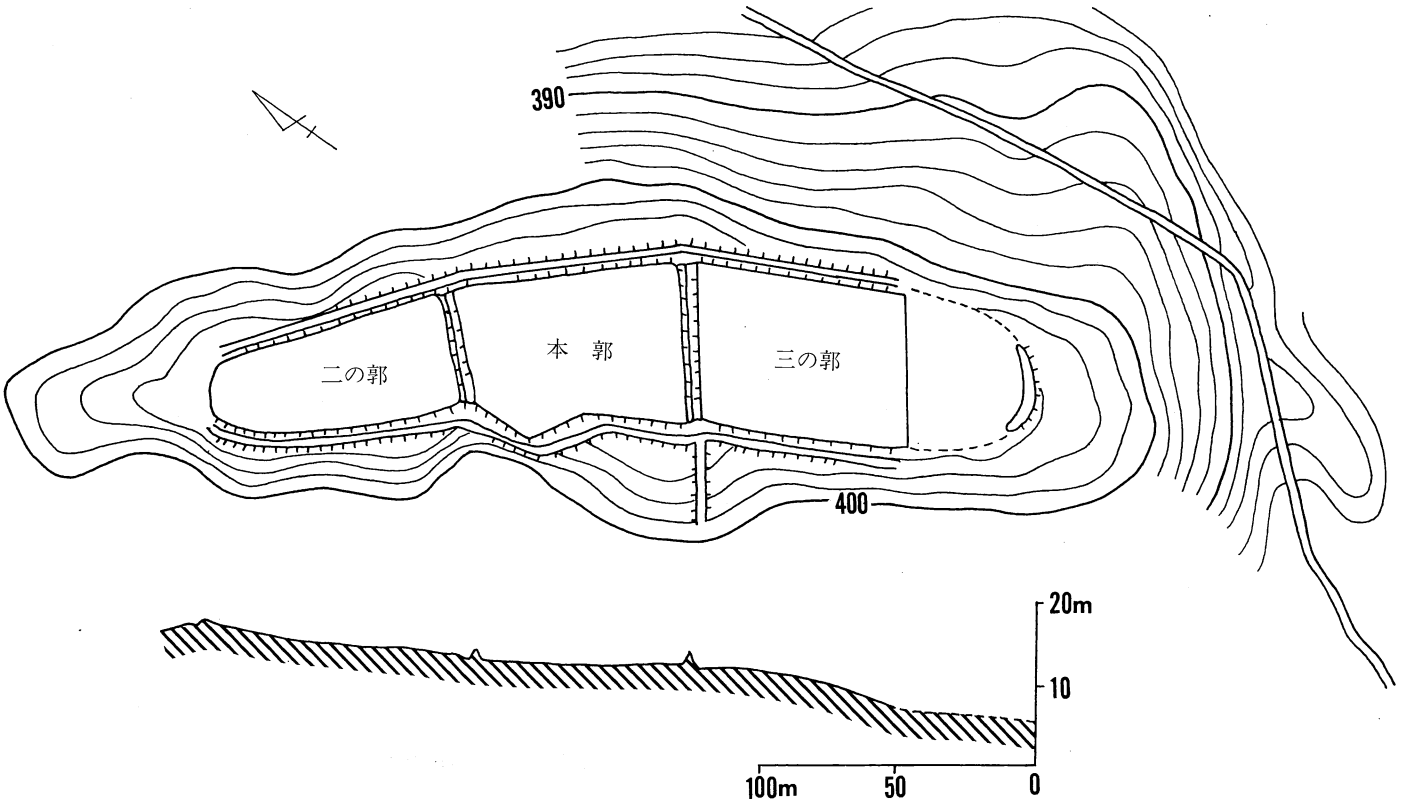
安源寺城跡遺跡はその名称が示すとおり、中世の山城として周知されてきた。安源寺城については次のように言われている。連郭式の平山城であり、本郭は８０×６０ｍの長方形を呈し、左右（南北）に高さ２ｍ、基底幅６～８ｍの土塁がある。空堀を挟んで東側に120×60mの三の郭があり、その先の東側が大手とみられている。二の郭は本郭の北側にあり、90×40mの大きさをもつ。先端に土塁、掘切がある。城から約500mのところに安源寺館跡がある。

天文22年（1553）に始まった甲越合戦のおりに、当時中野を所領としていた高梨（政頼）氏に対して、弘治元年（1555）前後、高梨氏の館の背後を領有する小嶋、夜交氏が反旗を翻し、武田氏に従った。高梨氏は領地を失い飯山城に退却したとされている。

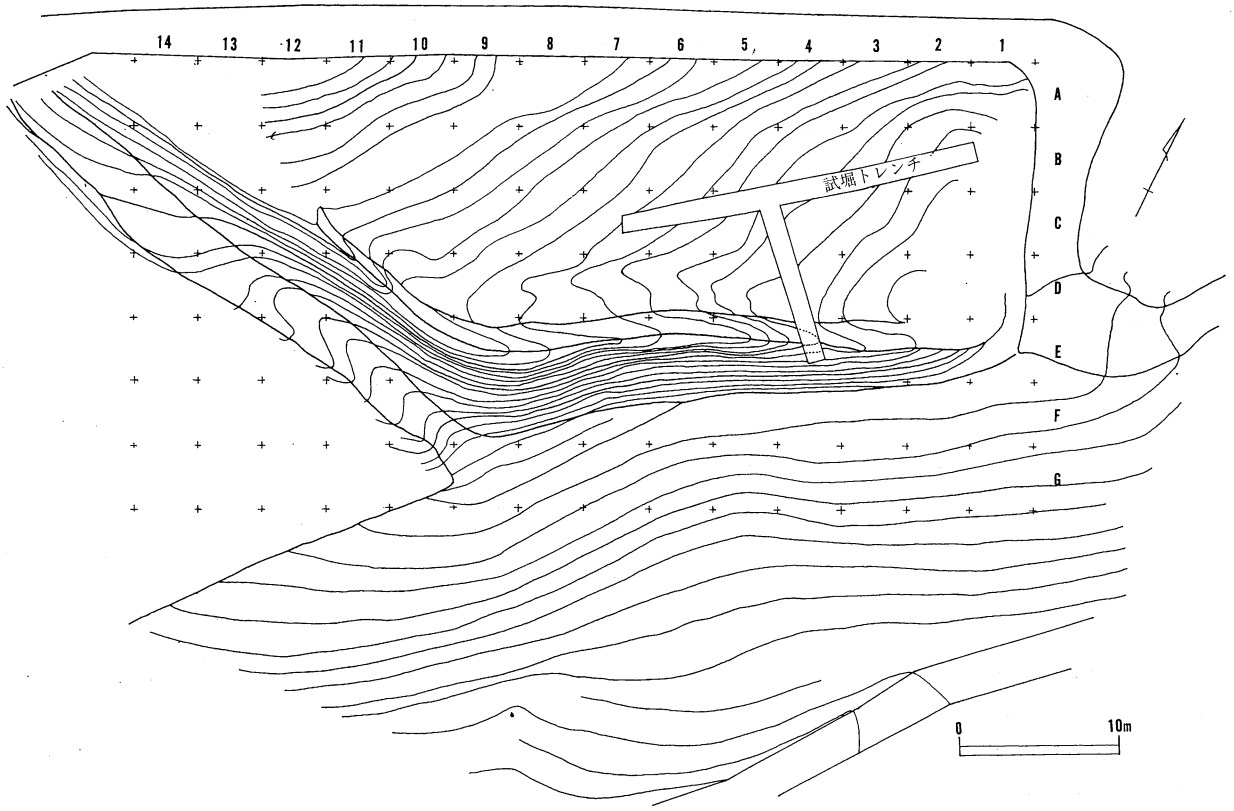
その後、永禄３年（1560）の川中島八幡原の合戦を契機に上杉勢は武田勢におされ、越後に退却し、上杉方の高梨氏も失地の回復がかなわぬまま越後に移った。

武田氏の滅亡、織田信長の死により、信濃四郡はふたたび上杉氏の領有するところとなった。高梨正頼はすでに越後で客死しており、正頼の子、頼親が30年ぶりに旧領地へ帰郷した。しかし、高梨氏の本来の館である中野館には、甲越合戦以来小嶋氏が反高梨氏の恩賞として在城していた。

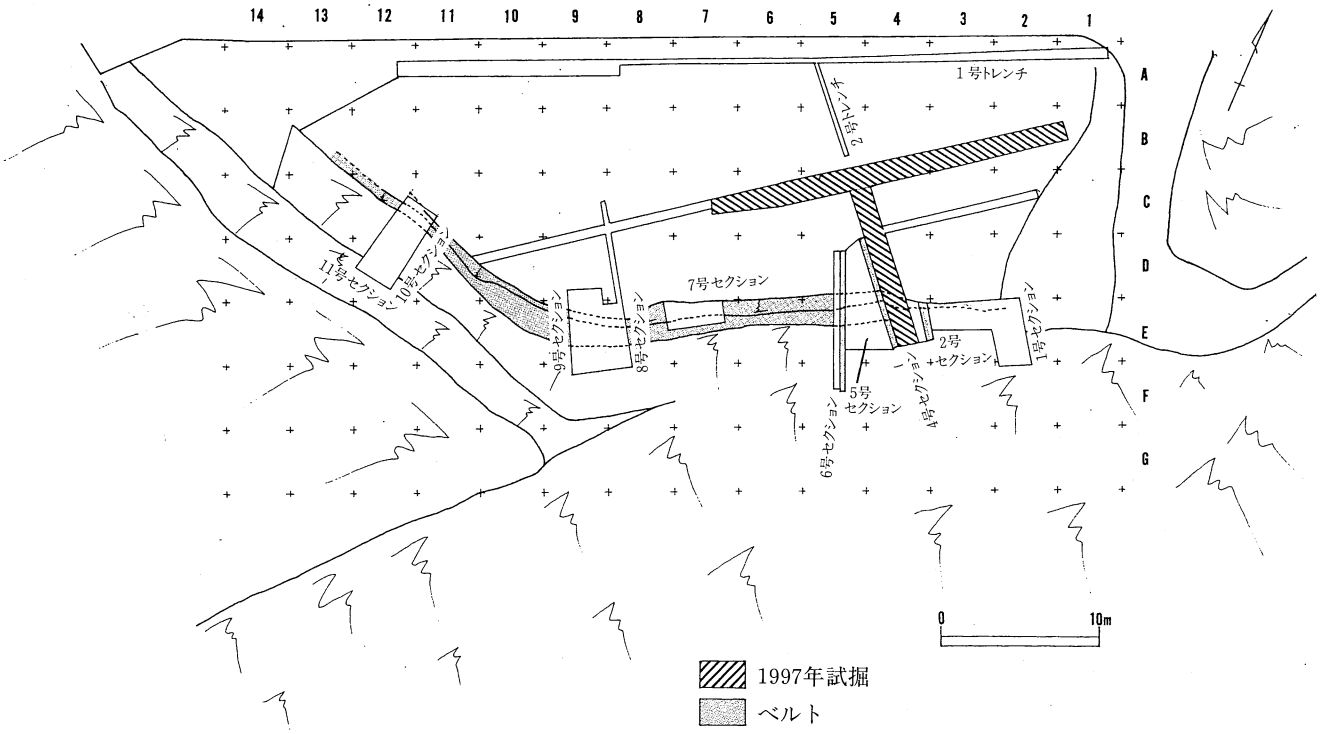
そのため、高梨氏はすぐに中野館に入城できず、急遽安源寺館と安源寺城が造られることになったといわれる。その後、天正18年（1590）,小嶋氏より中野館を譲り受けている。



第４図　安源寺館跡



第５図　調査区地形



第６図　調査区トレンチ配置

安源寺館と安源寺城は旧領地に帰郷した高梨頼親が中野館に入城できるまでとどまっていたとされる。

第4節　調査区について

1　位置

安源寺城跡三の郭の先端部分にあたる。先述したように半島状にほぼ南北に伸びた高丘・長丘丘陵を東西に横断する小高い丘陵項部の東端部にあたる。

2　調査以前の状況

調査区は西から東に緩く傾斜している。その比高差は約90cmを測る。軽斜面の西と北側をのぞいた縁には土塁状の遺構が認められる。土塁状遺構の外側にはややさがって、一段テラス状になった平坦面がある。テラス状の平坦面の中央はやや窪んでいた。テラス状の平坦面は東斜面から南斜面にかけて、丘陵の周囲を囲むように延びている。テラス状の平坦面の下位は急峻な崖となっている。

地主の話では戦後しばらくは雑木林であった。その後、牧草地として利用するため、重機によって抜根を行ったいう。調査時は荒地となっていた。

トレンチによる試掘調査や地表の観察から、隣接する墓地の建設に伴う土砂がおかれていたと考えられた。また、広い面積が削平されている可能性が考えられた。

3　調査

残土置き場の都合から、調査区を三分割し、前年度の試掘トレンチの土層堆積状況を参考に重機による表土剝ぎをおこなった。また、遺構の有無や旧地形を観察するため、南北に設けられていた試掘トレンチを延長するともに、直交する東西にもトレンチを設定し、手掘りで調査した。また、グリッドは4×4mで設定した。

削平は想像以上に広い面積にわたり、試掘トレンチを多く設定し、その土層観察しながら、平面調査による遺構検出を行った。

4　土層

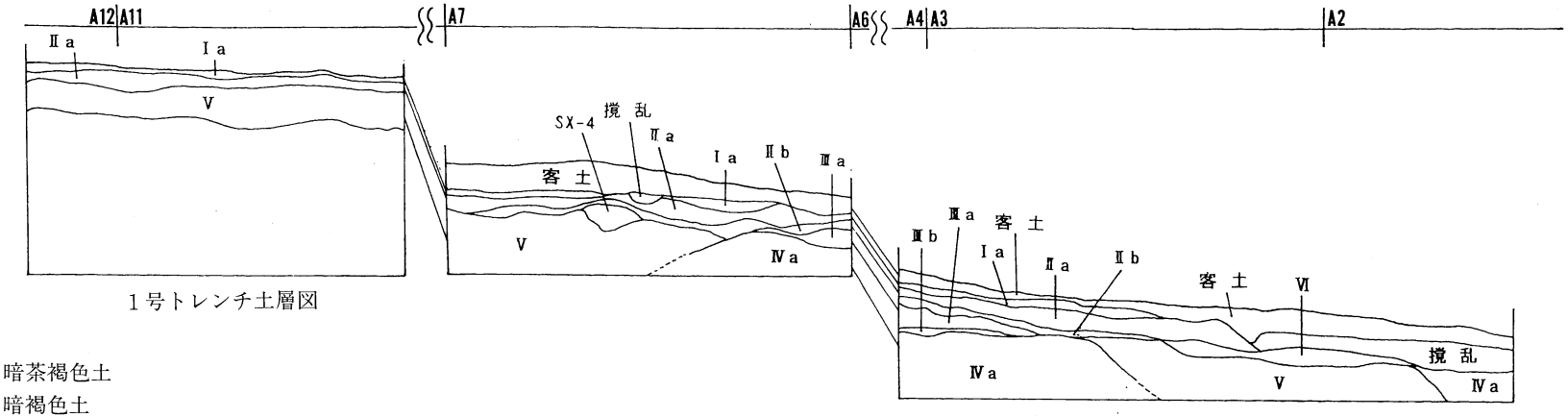
（1）　基本層序

調査区周辺の基本層序は下記のようになると思われる。

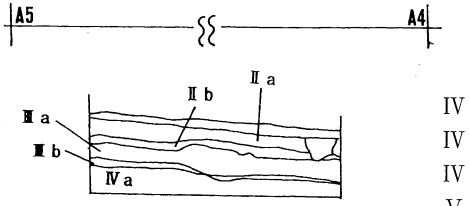
Ⅰａ層：暗茶褐色土（雑草類の腐植土）

Ⅰｂ層：暗褐色土（雑木類の腐食土）

Ⅱａ層：黄茶褐色土

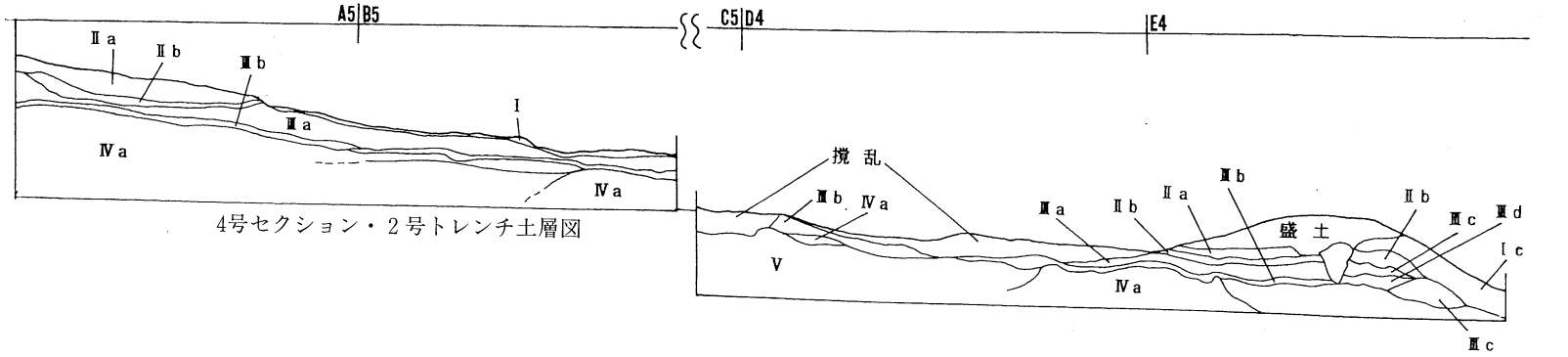


1号トレンチ土層図



Ⅰa　暗茶褐色土
Ⅰb　暗褐色土
Ⅰc　明褐色土
Ⅱa　黄茶褐色土
Ⅱb　暗黄茶褐色土(黄茶褐色土と黒褐色土が斑状に混る)
Ⅲa　黒色土
Ⅲb　黒褐色土
Ⅲc　黒褐色土
Ⅲd　黒褐色土砂礫土
Ⅲe　黒褐色土黄白褐色土が混る(しまりのない層)

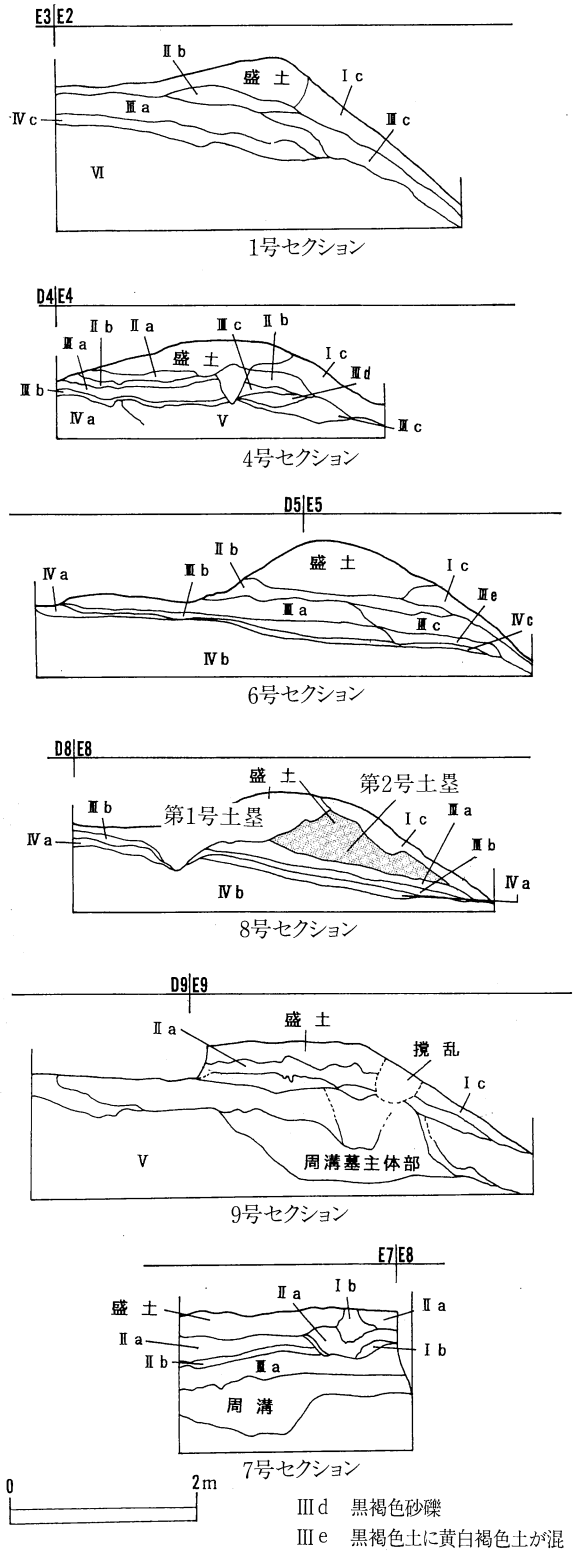
Ⅳa　黄白褐色土（赤茶褐色のスコリア粒子を含む）
Ⅳb　黄褐色土（小礫を含み、しまりのない層）
Ⅳc　黄白褐色土に黒褐色土が斑状に混る(しまりのない層)
Ⅴ　黄色砂礫
Ⅵ　黄褐色土と黄色砂礫の混り、黒褐色土が所々に斑に混る



4号セクション・2号トレンチ土層図

0　2m

第7図　調査区土層図



Ⅰa　暗茶色土
Ⅰb　暗褐色土
Ⅰc　明褐色土
Ⅱa　黄茶褐色土
Ⅱb　暗黄茶褐色土(黄茶褐色土と黒褐色土が斑状に混る)
Ⅲa　黒色土
Ⅲb　黒褐色土
Ⅲc　黒褐色土(しまりのない層)
Ⅲd　黒褐色砂礫
Ⅲe　黒褐色土に黄白褐色土が混じる(しまりのない層)
Ⅳa　黄白褐色土(赤茶褐色のスコリア粒子を含む)
Ⅳb　黄褐色土(小礫を含み、しまりがない)
Ⅳc　黄褐色土に黒褐色土が斑状に混じる(しまりがない)
Ⅴ　黄色砂礫土
Ⅵ　黄褐色土と黄色砂礫の混り、黒褐色土が所々斑に混る

第8図　調査区土層

Ⅱb層：暗黄茶褐色土（黄茶褐色土と黒褐色土が斑状にまじる）

Ⅲa層：黒色土

Ⅲb層：黒褐色土（Ⅳa層が土壌化して変色したものと思われる）

Ⅳa層：黄白褐色土（赤茶褐色のスコリア粒子を含む）

Ⅳb層：黄褐色土

Ⅴ　層：黄色砂礫層

（2）　調査区の土層

調査区においては上記の基本層序を基本としながら、いくつかの層が付加される。以下その状況について見ておきたい。

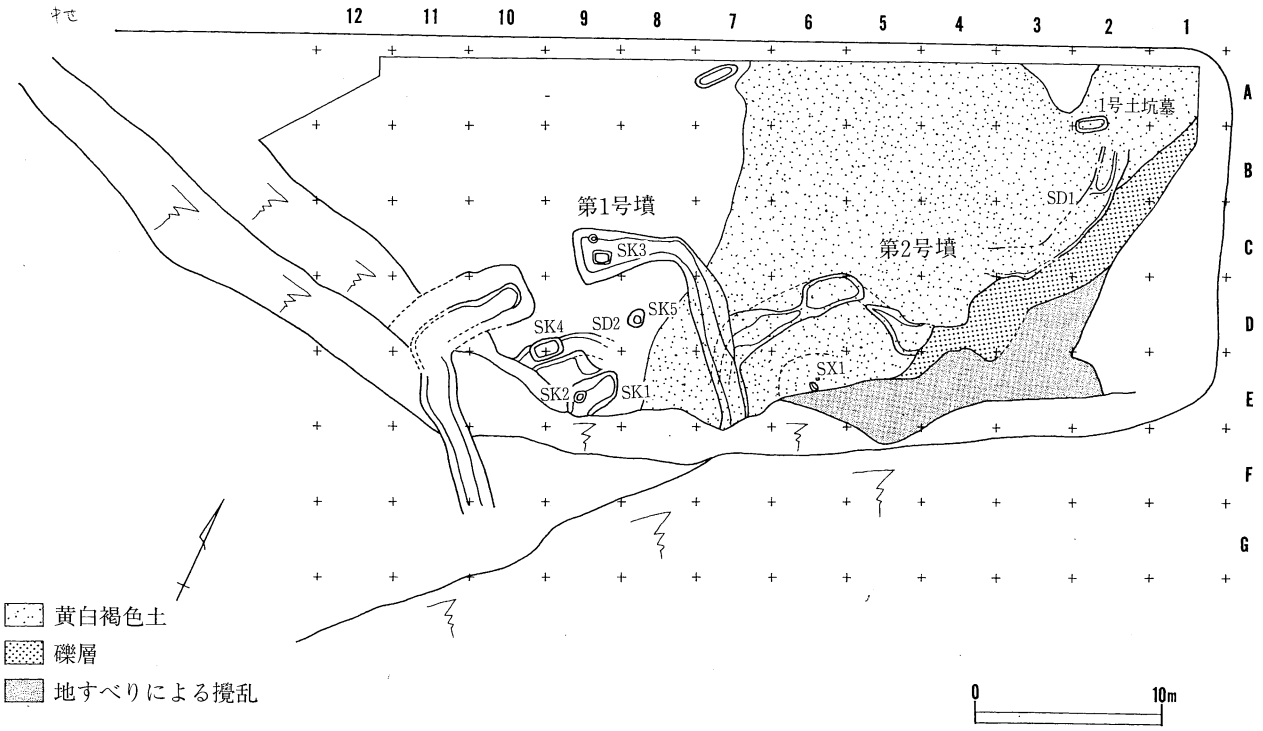
Ⅰa層：主に蔓などの雑草類を主体とした腐植土と旧耕作土が混じった層で、おそらく荒地になってから堆積したものと思われる。

Ⅰb層：主に雑木類の葉を主体とした腐植土、雑木林が存在したときにたいせきしたものと思われる。

Ⅰc層：中世安源寺城の切りとおしと思われる斜面、地すべりによって生じた斜面に堆積している。Ⅱa層の二次堆積と思われる。

Ⅱa層：撹乱されていない部分にのみ分布する。近世の遺構には本層が覆土になっていると思われるものがある。

1号トレンチA6～A7グリッドではⅡa層が欠落する。しかし、Ⅲa層を覆土とした遺構



第９図　遺構配置図

がＶ層まで掘り込まれ、その上位にＩＩｂ層が堆積している。ＩＩａ層堆積以前にはＩＩＩａ層が堆積していたと考えてよいであろう。

これらのことから、旧地表面は削平されたものと考えられる。そして、ＩＩａ層は旧地表面が削平されたあと堆積したものと思われる。

また、平安時代の遺構の覆土はＩＩＩａ層であった。すくなくとも平安時代まではＩＩＩａ層が供給される状況下にあったと思われる。

ＩＩｂ層：ＩＩａ層とＩＩＩａ層の境界を分層したもので、茶褐色土と黒色土が斑点状になって層を構成している。混入の割合は場所によって多少ことなり、形や大きさにも差がある。

旧地形の削平に関連があると思われるが、それ以上のことは不明である。

ＩＩＩａ層：黒色土で、主に弥生時代後期から古墳時代初期にかけての遺物を包含する。ＩＩＩａ層を覆土とする遺構の分布から調査区全体に分布していたものと思われる。

ＩＩＩｂ層：ＩＶａ層が土壌化、あるいは上層のＩＩＩａ層によって変色したもの。

ＩＩＩｃ層：締まりのない黒褐色土で再堆積層と考えられる。

ＩＩＩｄ層：黒褐色砂礫層

ＩＩＩｅ層：締まりのない土層で、黒褐色土に黄白色土が混ざる。

ＩＶａ層：湖成層が隆起し、土壌化したものと考えられる。旧石器遺物を含む。

Ⅳｂ層：締まりのない黄褐色土層で小礫を含む。

Ⅳｃ層：締まりがない土層で黄白褐色土に黒褐色土が斑点状に混ざる。

Ⅴ　層：黄色砂礫層で、本調査区の基盤となる。

5　地すべりについて

調査区一帯は地すべり発生地帯として良く知られている。今回の調査区にも地すべりの痕跡が残されていた。

トレンチ等で土層の堆積状況を観察していくと締まりがあってきれいに堆積した層がいきなり締まりのない乱れた土層に変化する。地すべりの影響を受けたためと思われ、Ⅲｃ、Ⅲｅ層、Ⅳｃ層、Ⅵｃ層がそれに該当する。

調査区では尾根の先端にむかって東北から南西方向に礫層が帯状に分布する。この層を境界として、先端部側の土層は混入物の多い締まりのない土層となっており、地すべりの影響をうけているものと思われる。

第２章　弥生時代の遺構

第１節　第１号前方後方墳丘墓

中世遺構を検出している際に土抗墓と思われる遺構が検出された。1基からは管玉、勾玉が検出され、土塁状遺構断ち割りの際にも土塁の下位に土抗が確認され、土器片と鉄製品が出土した。、中世面以下に古墳の存在が想定された。そこで、上層の調査終了後に検出面をやや下げ、遺構の検出作業をおこなった。

後世の攪乱が遺構検出面にまで及んでいるところもあり、当初は微量の土器片が検出されるのみだったが,土塁状遺構の周辺から周溝の一部が検出され、検出面を精査したところ、前方後方墳丘墓であることが確認された。

また、第１号前方後方墳丘墓の東北側に、周溝が一部切りあった状況で第２号前方後方墳丘墓が検出されている。

1　位置

Ｃ８、Ｃ９、Ｄ７～Ｄ１２、Ｅ７～Ｅ１２、Ｆ７～Ｆ１１、Ｇ１０～Ｇ１１グリッドに位置する。丘陵先端部のほぼ中央。

2　方向

主軸は東南―西北方向で、丘陵の軸に直交する。

3　遺存状況

後方部の東南側の周溝が地すべりによって失われている。残存している部分も上面が攪乱されている。周溝で囲まれたほぼ中央から主体部と思われる土抗が発見され、その上位には墳丘の一部が残存していた。

4　平面形態

西北にブリッジをもつ方形（約16×16m）である。周溝はブリッジの付近で、外側に幅を広げ、台形状となっている。現存全長約13m、幅約16.2m。周溝幅2.08～1.4m、深さ1.32m～12cm。

5　遺物の出土状況

墳丘部では主体部と思われる土抗の上層に円形状の土抗が検出され、壺半個体分（第33図46）が出土した。

出土遺物の大半は両側の周溝から検出され、主体部の両側、周溝の中央部分に集中している。

6　第２号前方後方墳丘墓と新旧関係について

１号前方後方墳丘墓と第２号墳丘墓の周溝がほぼ平行して重複することは検出時から明らかであったが、その新旧関係については平面的には把握できなかった。そこで、断面観察から新旧関係について検討した。

第２節　第１号前方後方墳墳丘上に認められた土抗（主体部）

墳丘上では四基の土抗が検出されているが、第１号前方後方墳に関連すると考えられる土抗は第１号土抗と第２土抗である。

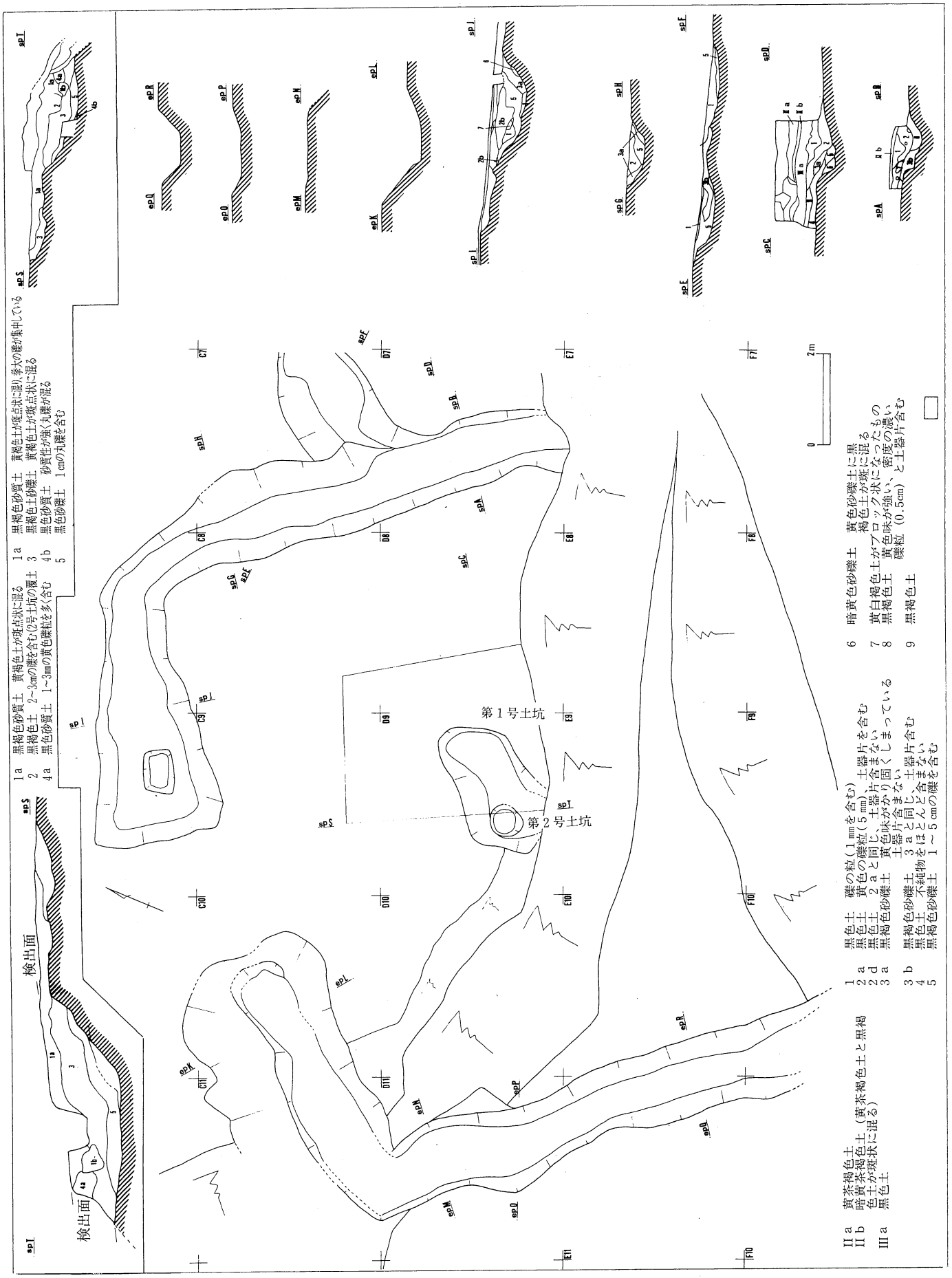
1　第１号土抗

320×180cm、深さ約３０～４０cmの長楕円形を呈し、後方部のほぼ中央、E9グリッドで検出された。小型鉄剣状鉄製品や弥生時代後半の土器片が出土した。

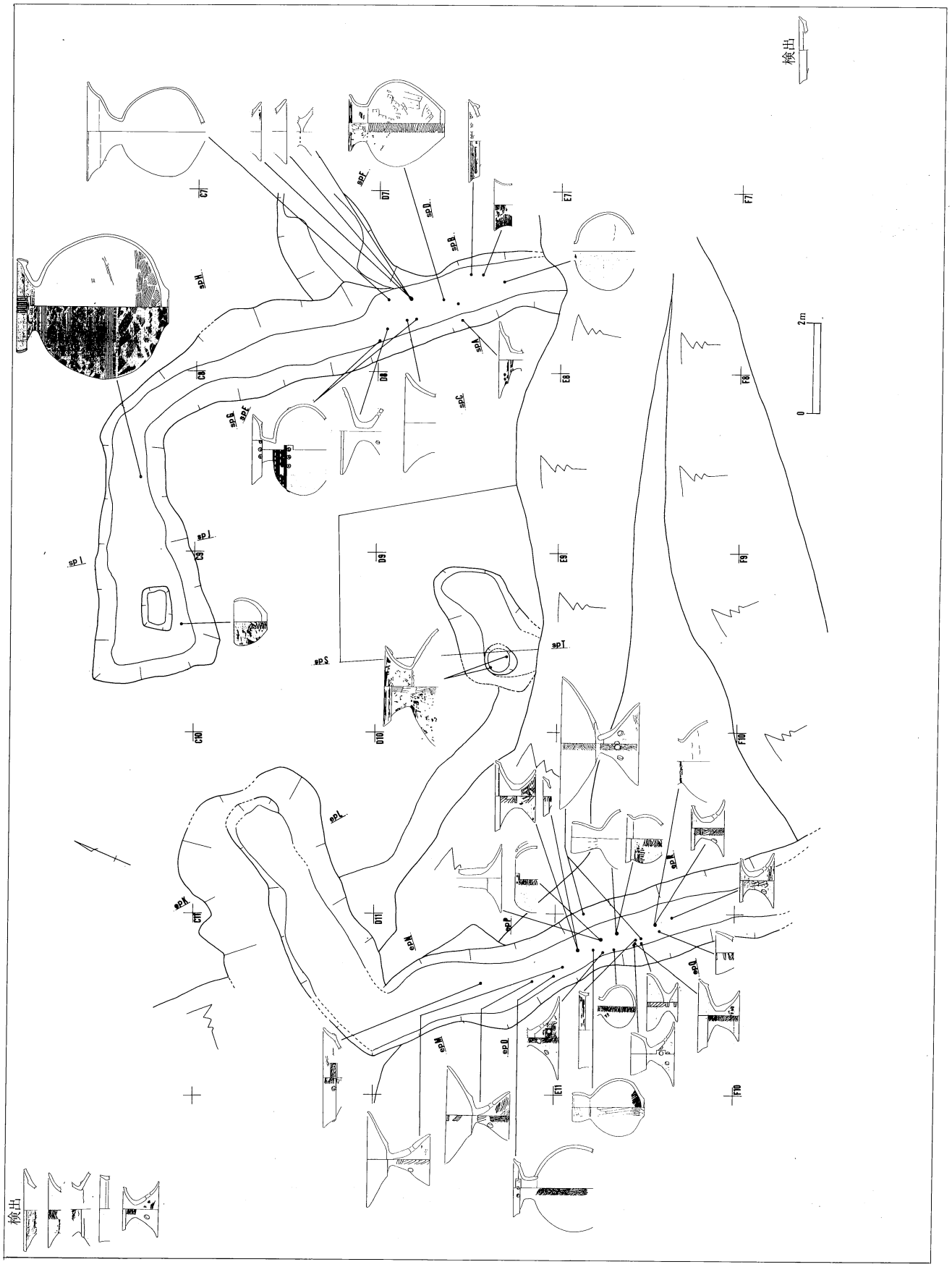
土塁状遺構の下面から検出され、土抗の南西部分は土塁構築の際に攪乱されたものと思われる。

2　第２号土抗

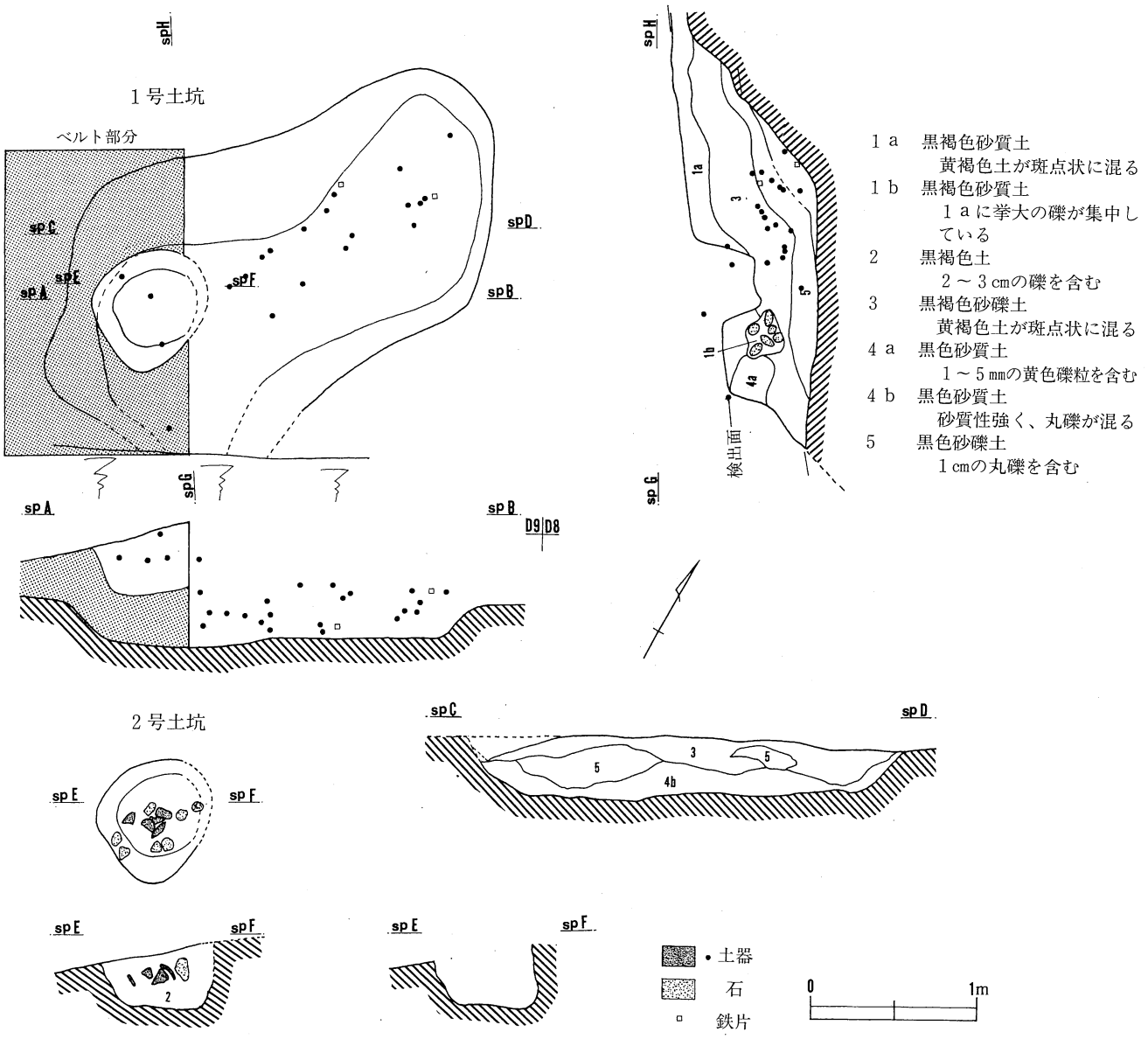
第１号土抗の南西側、Ｅ９グリッドに位置する。径約76cmの円形を呈し、深さ40cmの断



第10図　第2号前方後方墳丘墓



第11図　第１号前方後方墳丘墓　遺物出土状況



第12図　第1号土坑、第2号土坑

面摺鉢状を呈した土抗である。検出面で壺半個体分が集中して発見された。

第3節　第2号前方後方墳丘墓

1調査経過

中世遺構検出時から比較的多くの土器片が検出されていた。土塁状遺構部分以外は後世の攪乱をうけていたが、黒色土（Ⅲa層）が厚く堆積した部分であったためか、かろうじて残存している状況であった。上層の調査終了後精査を行ったが、周溝の遺存状況は良くなく、一部の周溝が残存していたに過ぎない。

2 位置

D4～D8、E4～Ｅ８グリッドに位置し、第１号前方後方墳と重複する。

3 方向

主軸は東北―西南である。

4 遺存状況

東南部半分は地すべりによって失われている。周溝も黒色土（Ⅲａ層）中に掘り込まれ、さらに後世の攪乱が加わっていたため、検出面を下げざる得ず、周溝の底の部分が検出されたにとどまる。

後方部では正方形をした浅い落ち込みを確認した。この浅い落ち込みの上面には焼土が確認されている。

5 平面形態

半分以上が失われているため、その全形は推測にとどまるが、前方部は台形、後方部は方形を呈するものと思われる。現存する全長約12.9m、幅約6mである。

6 遺物の出土状況

主に周溝上面に認められたが、小破片のものがほとんどであった。大半は検出時に出土した。墳丘上では遺物の検出数は少なかったが,大きな破片が認められた。E7グリッドではほぼ完形の台付甕が出土している。

第４節　第２号前方後方墳墳丘面上の落ち込み状遺構

地すべりを免れた後方部内に不定形な浅い落ち込み状の遺構が検出された。その上面、墳丘の中心部ちかくで焼土を確認した。検出状況からみて第２号前方後方墳丘墓に伴うものと考えられる。Ｄ６、Ｅ５、Ｅ６グリッドに位置していて、後方部と方向や形状が一致する。4.8×2.2m、深さ約10cm、焼土検出面から床面までは約20cmを測る。

遺物は焼土検出面より上面で検出された。焼土は二つのブロックに分かれ80×60cmの不整形を呈している。断面を観察すると下部でかろうじてつながっている。

この落ち込み状遺構は主体部との関連、焼土は埋葬時の祭祀の痕跡とも考えられるが明確な証拠はない。いずれにしろ、第２号前方後方墳との関連性が考えられよう。

第５節　その他の遺構

１　第１号溝

長さ9.8m、幅1～1.6m、深さ約6cm。わずかに底面を残す程度である。平面形は弧状であり、皿状の断面を呈している。覆土は黒褐色土。遺物の出土はなかった。形状規模から見て、前方後方墳丘墓の一部ではないかと思われる。

２　第３号土抗

平面形は隅丸長方形、断面タライ状を呈し、96×64cm、深さ24cmを測る。主軸の方向は東北―西南の方向にある。覆土は三層に分層できた。

３　第１号土抗墓

調査区の北端、Ａ、Ｂ２グリッドに検出された。南東側に第１号溝がある。約86×62センチメートルの隅丸長方形を呈し、深さ約16cmを測る。

勾玉一点、管玉二点が出土している。管玉は接合できなかったが、同一個体と思われる。

第３章　平安時代の遺構

第１節　埋甕状遺構

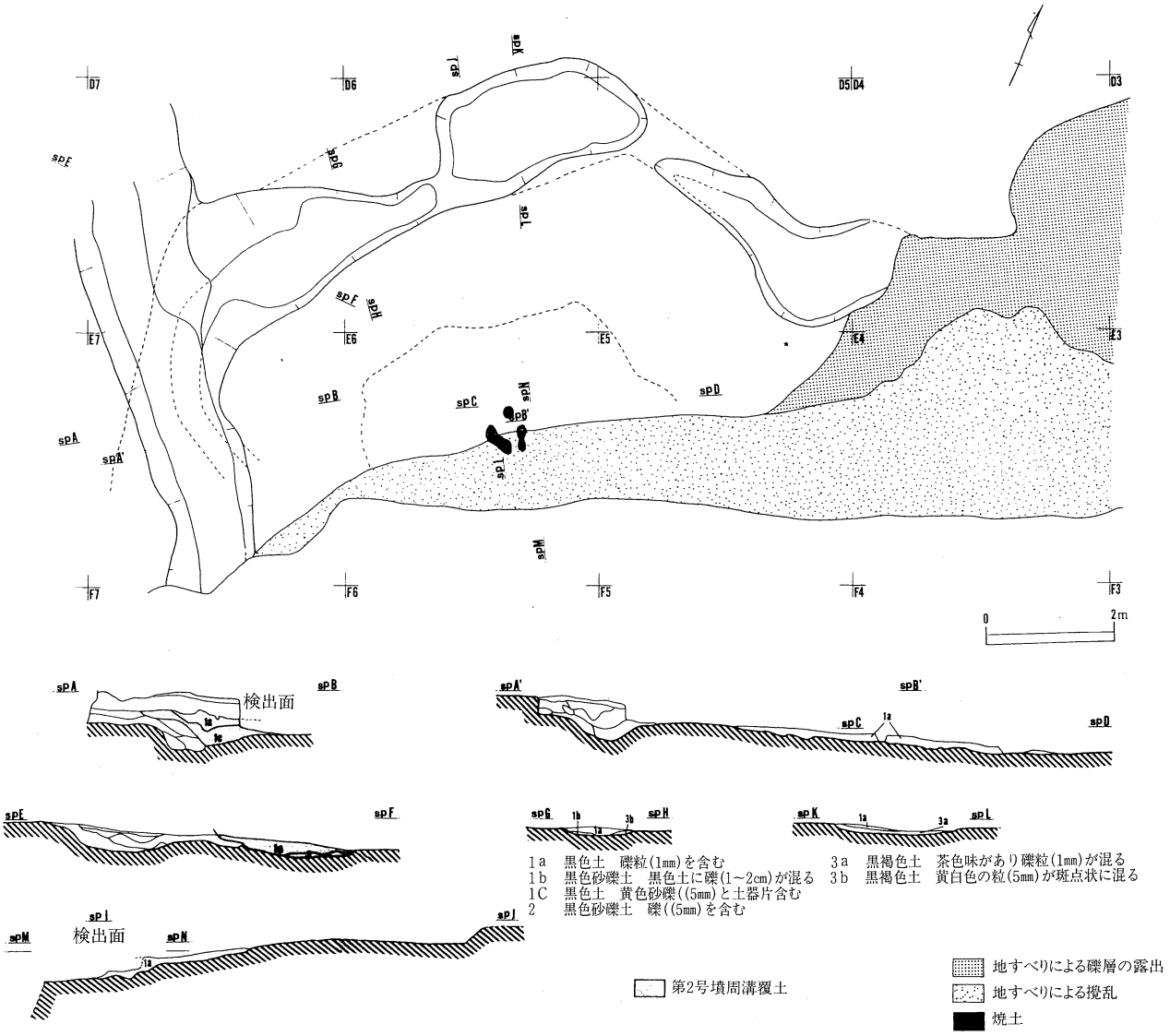
Ｃ９グリッドから検出された。１号前方後方墳の周溝覆土を掘り込み、地山の黄色砂礫層にまで達していた。完形の甕形土器が逆位に埋められ、内部に欠損した杯形土器が一点検出された。落ち込みの覆土は黒色土に黄白褐色土が混入しており、埋め戻されたものと思われる。

第４章 その他の遺構

第１節　土抗

１　第４号土抗

第１号前方後方墳内のＤ、Ｅ９～10グリッド内で検出された。1.6×0.9mの隅丸長方形を



第13図　第２号前方後方墳丘墓

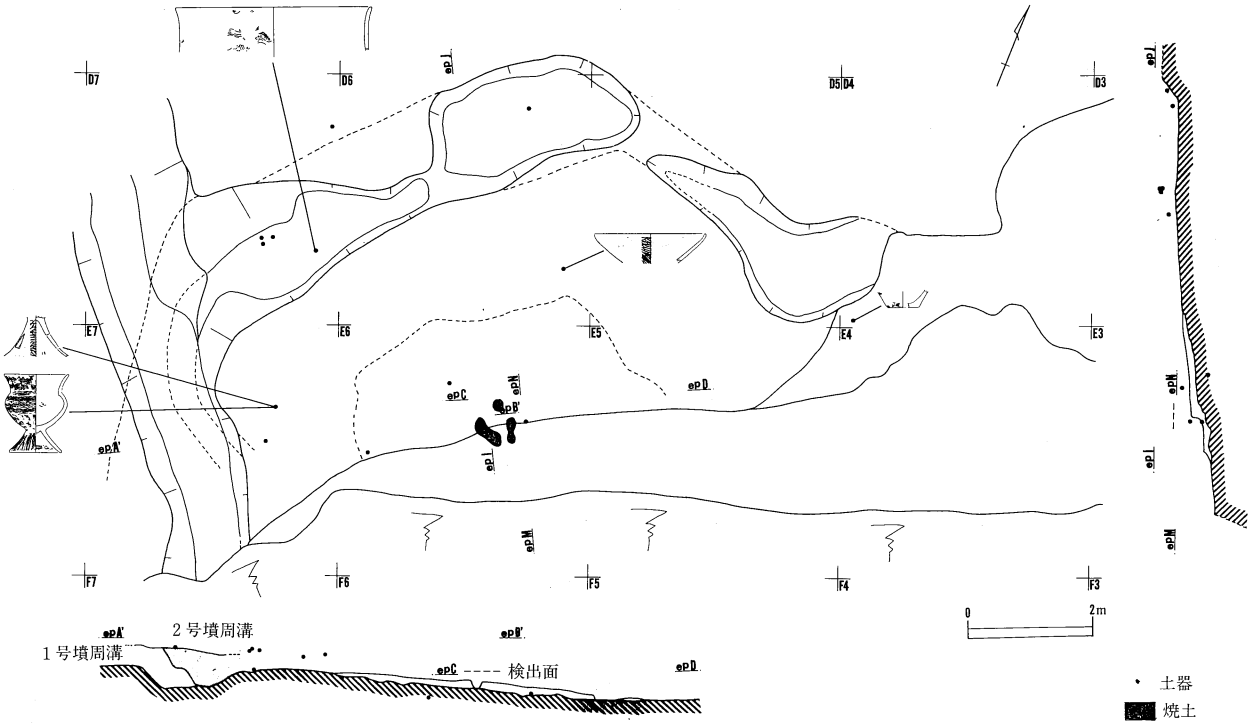
呈し、断面４cmの皿状を呈する。土抗底面の北西側から楕円形の礫が検出されている。１号土抗と主軸の方向が一致することなどから１号前方後方墳に関係する可能性もある。

２　第５号土抗

第１号前方後方の中心からやや北よりに位置し、97×74cmの楕円形を呈し、深さ約60cmの摺鉢状の断面形態を呈する。覆土から見ると中世以前の遺構と考えられる。

３　第６号土抗

2.34×0.6ｍの長楕円形を呈し、断面深さ約30cmの擂鉢状を呈する。軸は北東―南である。



第14図　第２号古墳　遺物出土状況

第２節　溝

１　第２号溝

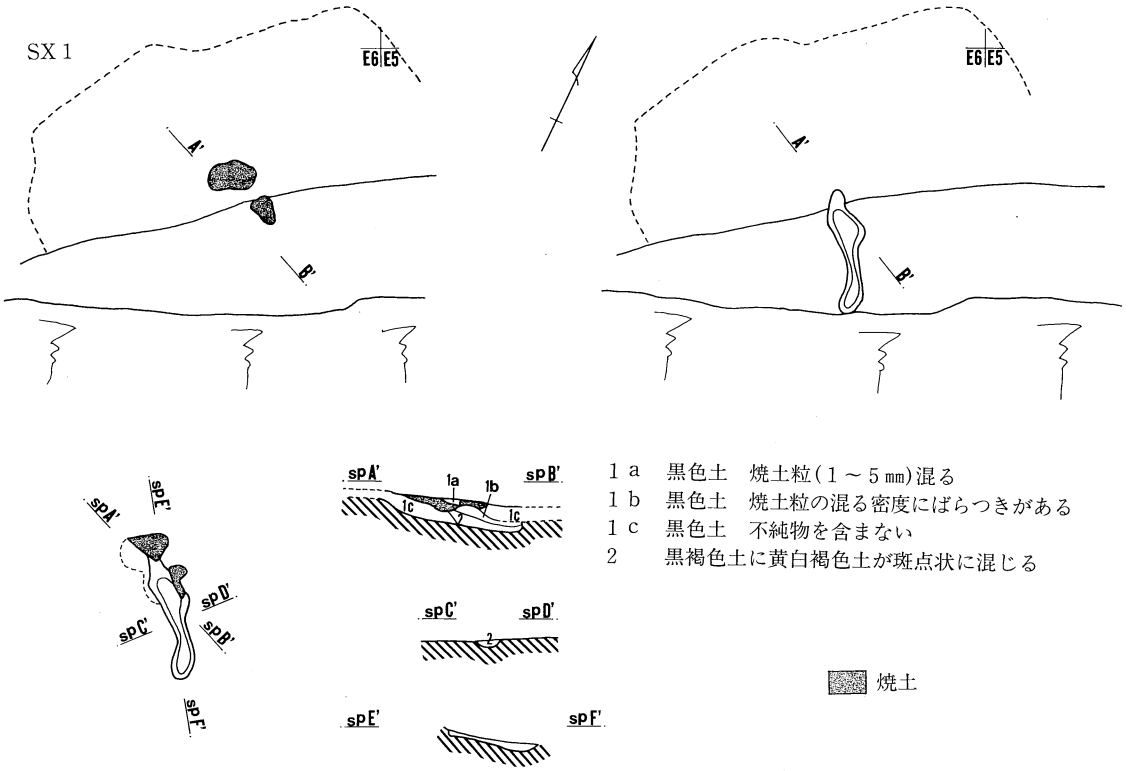
D、E－9、10グリッドにある。第１号土抗の北西側にあり、第１号土抗と平行する。長さ約4m、幅66cmで、断面はタライ状を呈している。土器片が三点検出されているが遺構に伴うものかどうか明らかではない。

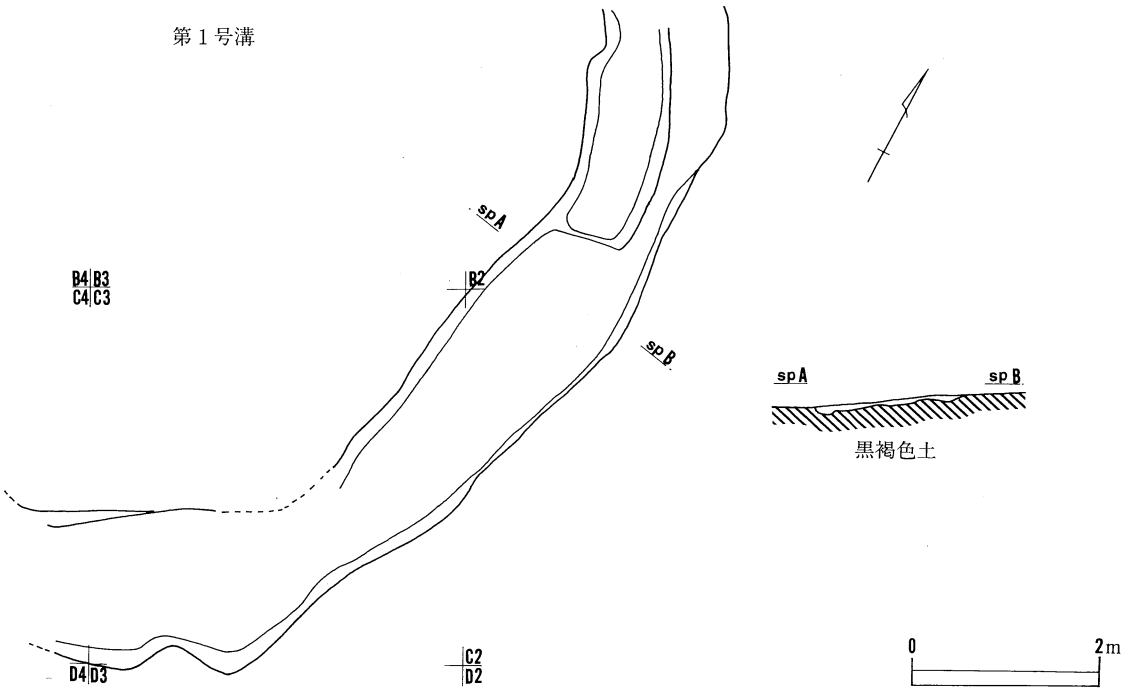
第５章 中世土塁状遺構

第１節　調査経緯

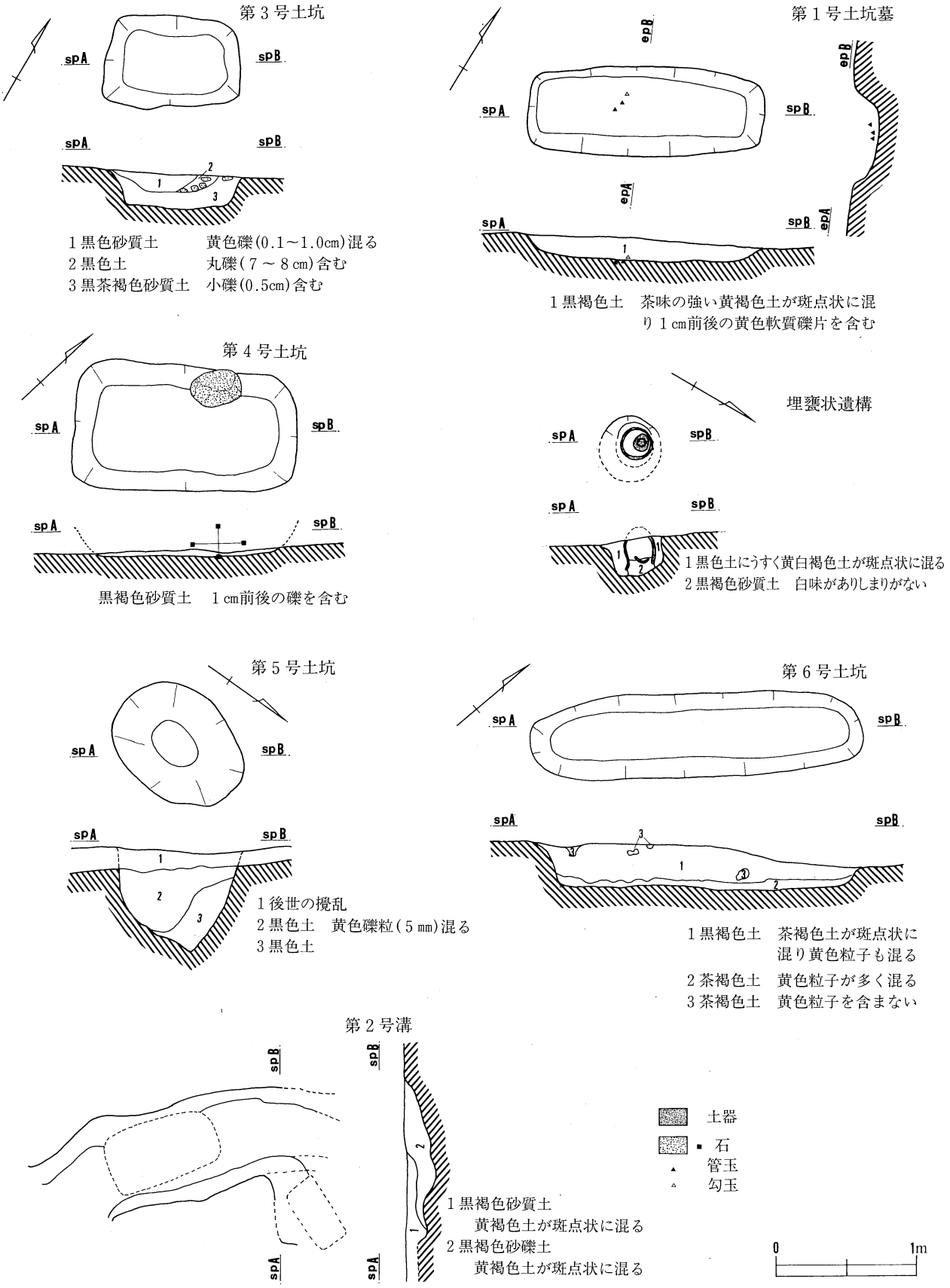
土塁と思われる遺構は調査区の南南東側縁部から西西南方向に延び、途中から西西北に方向を変え、調査区の境で北西に伸び、調査区を囲んでいる。

土塁の内側から調査を開始した。調査区の項でもふれたように、一帯は後世に削平され





第15図　ＳＸ１　第１号溝


第３号土坑
spA
spB
1 黒色砂質土　黄色礫(0.1～1.0cm)混る
2 黒色土　丸礫(７～８cm)含む
3 黒茶褐色砂質土　小礫(0.5cm)含む
第１号土坑墓
epA
epB
1 黒褐色土　茶味の強い黄褐色土が斑点状に混り１cm前後の黄色軟質礫片を含む
第４号土坑
黒褐色砂質土　１cm前後の礫を含む
埋甕状遺構
1 黒色土にうすく黄白褐色土が斑点状に混る
2 黒褐色砂質土　白味がありしまりがない
第５号土坑
1 後世の攪乱
2 黒色土　黄色礫粒(５mm)混る
3 黒色土
第６号土坑
1 黒褐色土　茶褐色土が斑点状に混り黄色粒子も混る
2 茶褐色土　黄色粒子が多く混る
3 茶褐色土　黄色粒子を含まない
第２号溝
1 黒褐色砂質土
黄褐色土が斑点状に混る
2 黒褐色砂礫土
黄褐色土が斑点状に混る
土器
石
管玉
勾玉
0
1m

第16図　土　坑

ていた。その面には第18図に示したように人骨や馬のものと思われる獣骨が散乱していた。これらの人骨や獣骨は近世の土抗墓等を壊して削平が行われたことを示すと考えられる。したがって、削平は近世以降に行われたと考えられる。

土塁は表土を剝ぎ、トレンチによる断ち割りを行った。その結果、新旧二つの土塁状の遺構が重複していることが明らかになった。新しいものを第１号土塁、古いものを第2号土塁と呼ぶ。

第２節　第１号土塁

結論から述べれば第1号土塁は近世以降のものである。おそらく,開墾の際に重機等で押して盛ったものであろう。

土塁を構成している盛り土は大小のブロックと締まりのない攪乱土からなる。なかには重機などでなければ盛れないと思われるブロックも含まれている（第17図)。

また、含まれる密度は場所ごとに異なるが盛り土の中には骨片が含まれている。これらの骨片は近世遺構を壊して結果と考えられ、盛り土が行われたのが近世以降であることを意味している。

さらに、第１号土塁は地すべりによってできた切り立った崖の縁辺部に造られている。地すべりが観察できない地点では第２号土塁を覆うように盛り土されている。

以上のように第１号土塁は近世以降のもであると考えられる。また、地もとの人の話では昭和30年代に重機による開墾を行ったという。

第３節　第２号土塁

1　位置

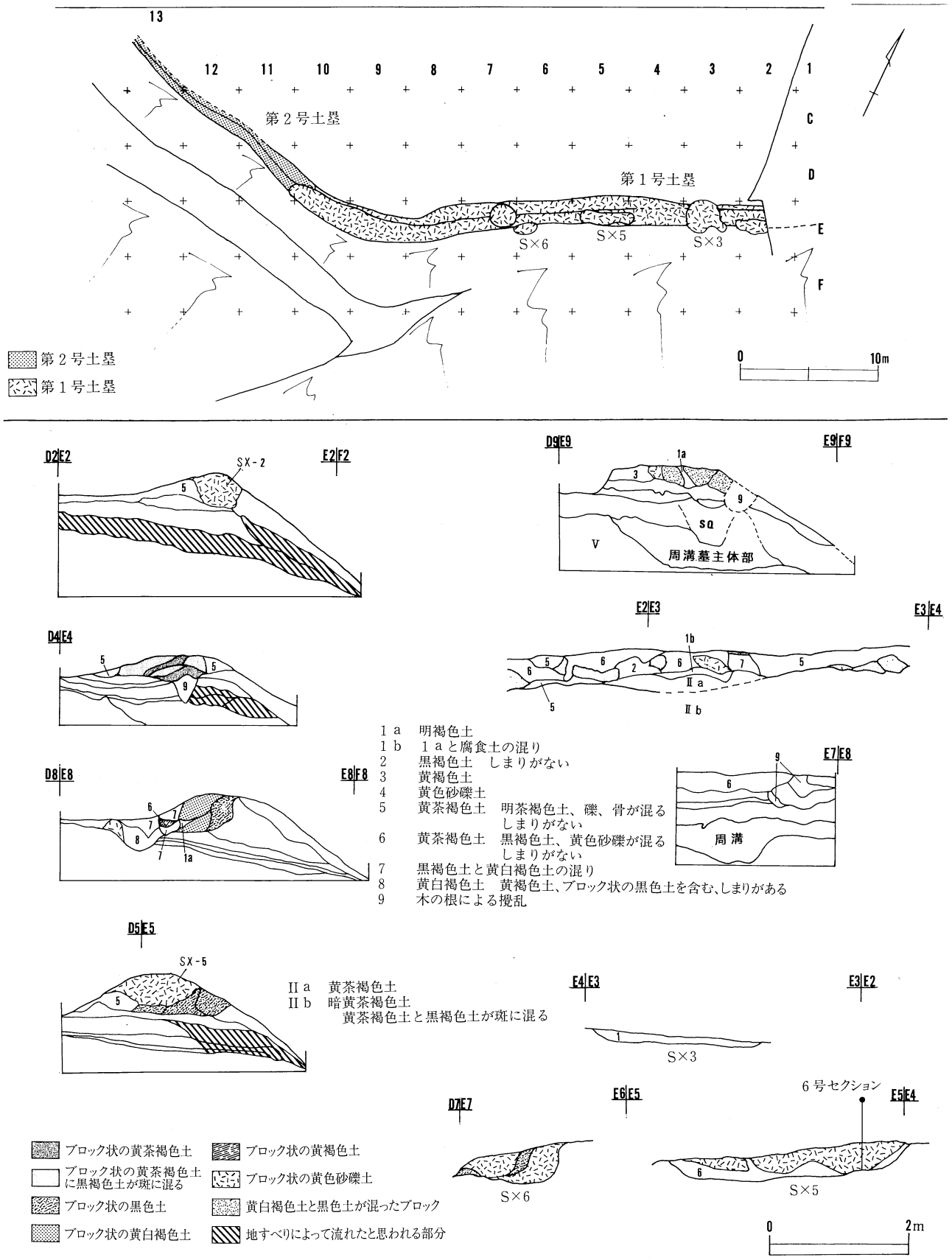
E8～１０、D10・１１、C11・１２、Ｂ１２・１３、Ａ１３・１４グリッドに位置する。

2 方位

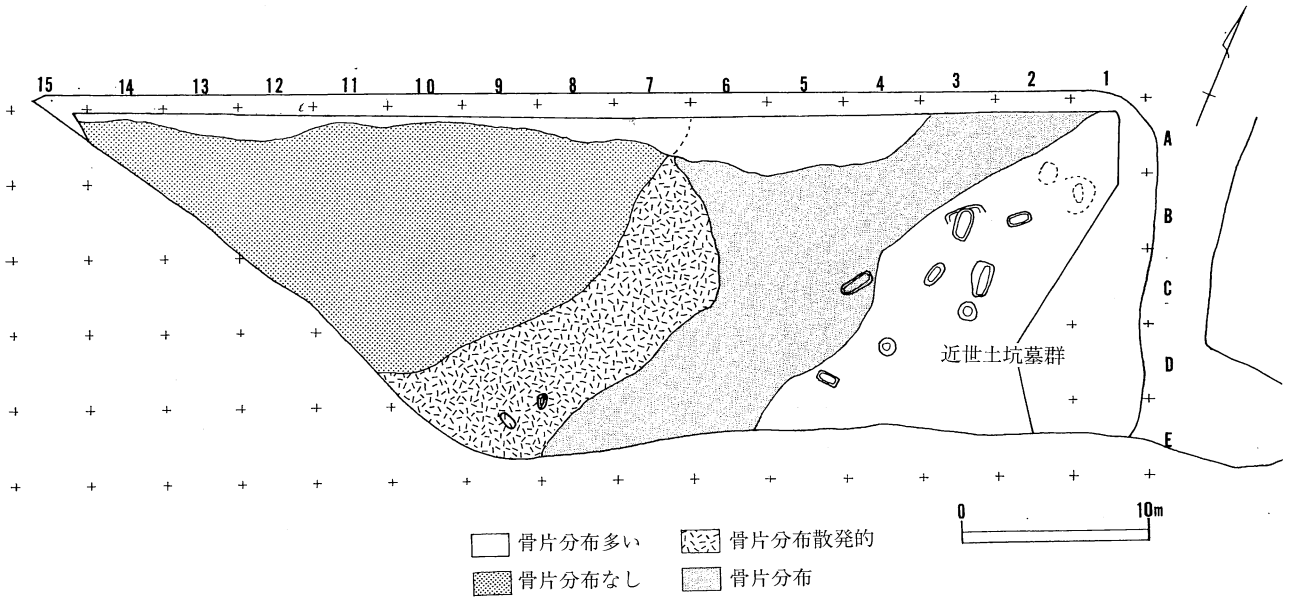
西西南方向へ延び、途中から西西北方向に曲がり、調査区の境あたりで墓地の造成によって切れられるが、さらに北西よりに向きを変えて延びているものと思われる。

3　遺存状況

第２号土塁はＥ７グリッドを境に東東北は地すべりのために確認できなかった。遺構が地すべりで切られているのか、地すべりの地形を利用し、そこでとめたのか新旧関係は確


第２号土墨
第１号土墨
S×6
S×5
S×3
第２号土墨
第１号土墨
0
10m
D2E2
SX-2
E2F2
D9E9
E9F9
sa
周溝墓主体部
D4E4
E2E3
E3E4
D8E8
E8F8
E7E8
周溝
１ａ　明褐色土
１ｂ　１ａと腐食土の混り
２　黒褐色土　しまりがない
３　黄褐色土
４　黄色砂礫土
５　黄茶褐色土　明茶褐色土、礫、骨が混る しまりがない
６　黄茶褐色土　黒褐色土、黄色砂礫が混る しまりがない
７　黒褐色土と黄白褐色土の混り
８　黄白褐色土　黄褐色土、ブロック状の黒色土を含む、しまりがある
９　木の根による攪乱
D5E5
SX-5
ⅡＡ　黄茶褐色土
ⅡＢ　暗黄茶褐色土
黄茶褐色土と黒褐色土が斑に混る
E4E3
E3E2
S×3
D7E7
E6E5
6号セクション
E5E4
S×6
S×5
0
2m
ブロック状の黄茶褐色土
ブロック状の黄茶褐色土に黒褐色土が斑に混る
ブロック状の黒色土
ブロック状の黄白褐色土
ブロック状の黄褐色土
ブロック状の黄色砂礫土
黄白褐色土と黒色土が混ったブロック
地すべりによって流れたと思われる部分

第17図　土　墨



第18図　近世遺構

認できなかった。

4　土塁断面の観察

8号セクションは幅1.74m、高さ64cmを計測する。盛り土されたものであることが明確であった。第9号セクションは幅2．16m、高さ32cmを計測する。盛り土されたものかどうか不明確であったが、IIa層が堅くしまっていることから土盛りされたと考えた。第10号セクションは幅2.04m、高さ40cmを計測する。土盛りされたものであるが、第8号セクションなどと異なり、砂質性が高く、礫を多く含む土層に変化している。

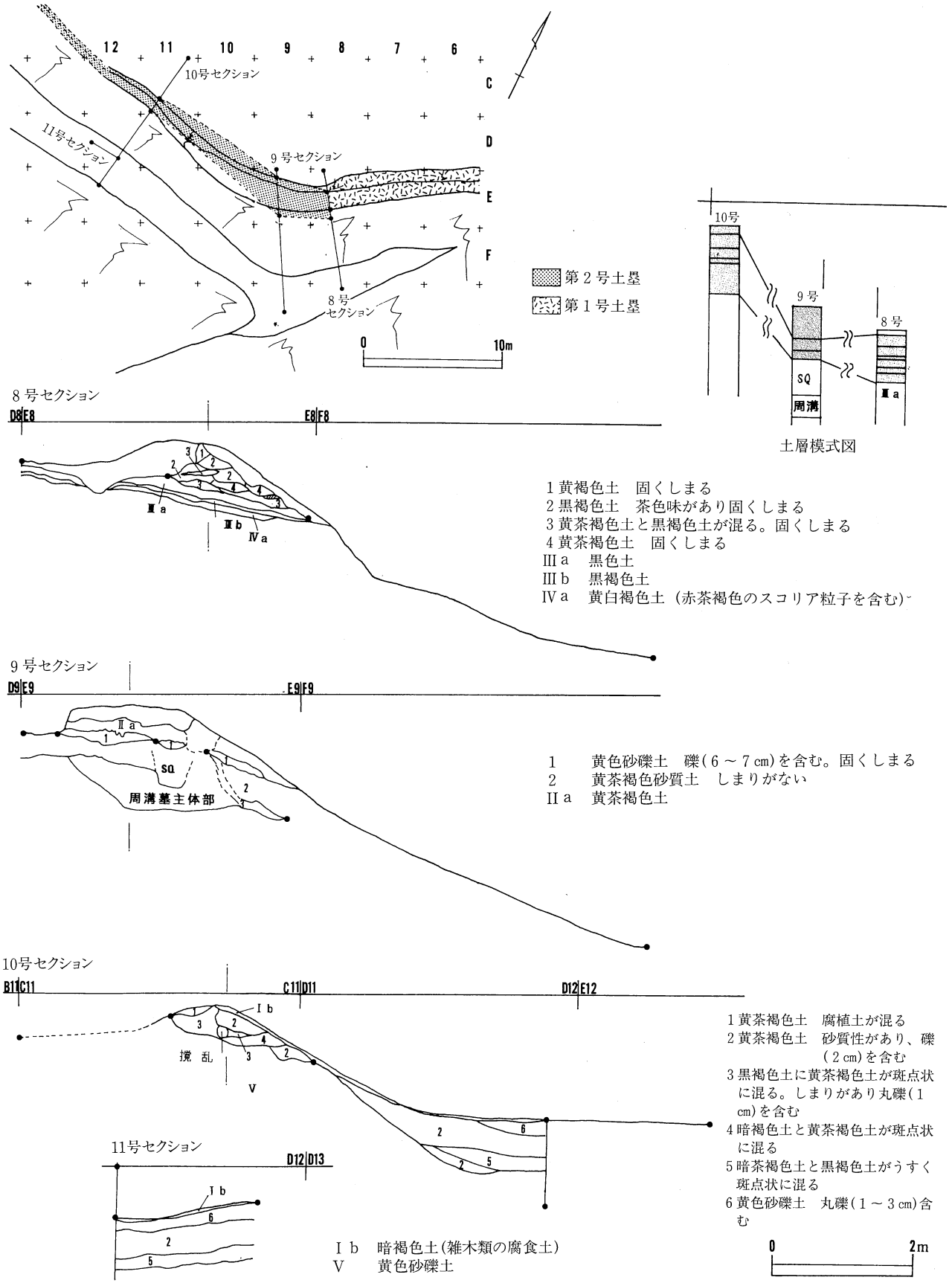
5　備考

今回の調査結果では第2号土塁が本当に土塁であるかどうか断言できない。

第4節　帯状テラス

第2号土塁に沿って、土塁頂部から約2.16m下位に、幅約3.2～2mのテラス状の平坦面が観察された。調査は様々な制約のためにトレンチ調査によったのみであり、その性格は明らかではない。テラスのトレンチ調査では土層は水平に堆積しており、かなり厚いものあることがわかった。

平坦ではあるがやや中央がへこんで見えることや、堆積土の厚さなどを考慮すると空堀状の遺構である可能性もある。


12
11
10
9
8
7
6
C
D
E
F
10号セクション
11号セクション
9号セクション
8号セクション
0
10m
第2号土墨
第1号土墨
10号
9号
8号
SQ
周溝
Ⅲa
土層模式図
8号セクション
D8E8
E8F8
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳa
1黄褐色土　固くしまる
2黒褐色土　茶色味があり固くしまる
3黄茶褐色土と黒褐色土が混る。固くしまる
4黄茶褐色土　固くしまる
Ⅲa　黒色土
Ⅲb　黒褐色土
Ⅳa　黄白褐色土（赤茶褐色のスコリア粒子を含む）
9号セクション
D9E9
E9F9
Ⅱa
SQ
周溝墓主体部
1　黄色砂礫土　礫(6～7cm)を含む。固くしまる
2　黄茶褐色砂質土　しまりがない
Ⅱa　黄茶褐色土
10号セクション
B11C11
C11D11
D12E12
Ⅰb
撹乱
Ⅴ
1黄茶褐色土　腐植土が混る
2黄茶褐色土　砂質性があり、礫(2cm)を含む
3黒褐色土に黄茶褐色土が斑点状に混る。しまりがあり丸礫(1cm)を含む
4暗褐色土と黄茶褐色土が斑点状に混る
5暗茶褐色土と黒褐色土がうすく斑点状に混る
6黄色砂礫土　丸礫(1～3cm)含む
11号セクション
D12D13
Ⅰb
Ⅰb　暗褐色土(雑木類の腐食土)
Ⅴ　黄色砂礫土
0
2m

第19図　2号土墨

第６章　遺　　物

第１節　旧石器時代の遺物

第Ｖ層から旧石器時代の遺物が出土した。遺構等の攪乱により、原位置は保っていないものと思われる。第２０図１は黒曜石製の台形様石器、厚い剥片を横に用いる。両側面の調整剥離の剥離角は９０度近い。２は瑪瑙製の不定形な剥片石器。基部あたりにわずかな調整剥離痕が観察される。先端にマイクロコンタクトフラクチャーが認められる。３はチャート製の厚い剥片。剥片背部には右側縁からの平坦な調整剥離が認められる。４は頁岩製の剥片で、剥片背部側の基部及び左側縁に平坦な調整剥離が認められる。５は石核である。ほぼ直方体の隣接する二面を剥片剥離作業面にしている。

第２節　弥生時代の遺物

１壺形土器

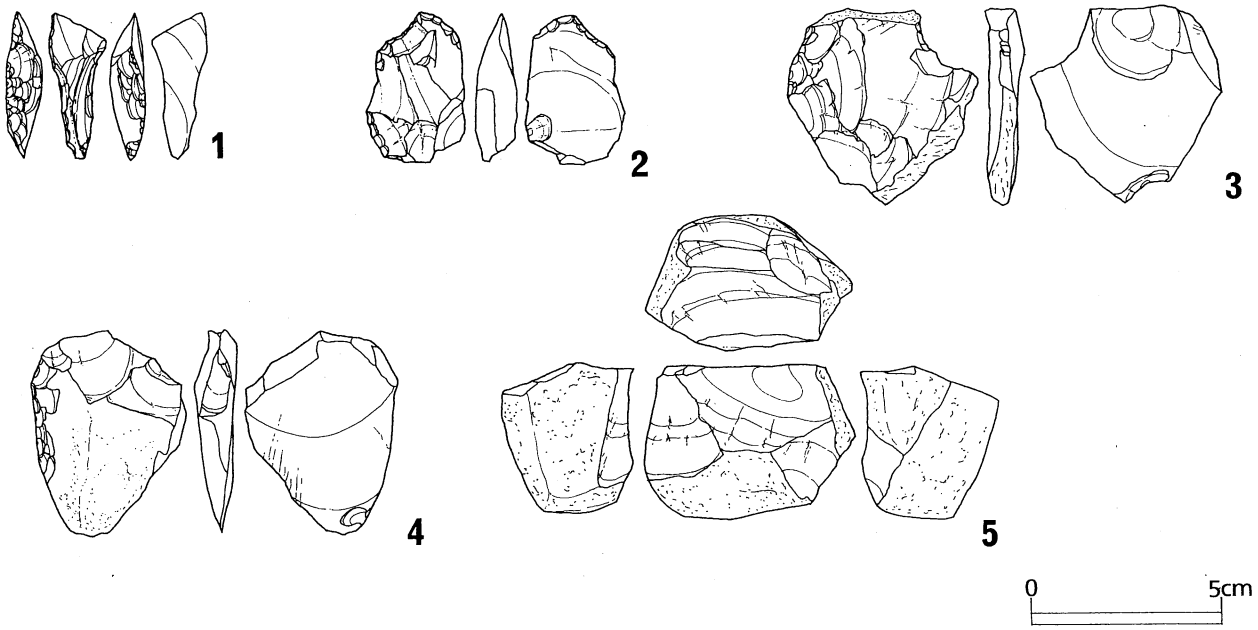
Ａ類（第２１図１、７）

いわゆるパレスタイルの壺である。胎土は褐色を呈し、ややもろい。全面が赤色に塗られている。器表は磨かれているが刷整形痕が残る。口縁部外面には棒状の粘土帯が張りつけられ、櫛描平行文が頸部から胴部最大径までの間に四段描かれ、その下位に山形の箆描文が施文される。最下段は三角形の刺突文が施文される。

７は頸部下端部に断面三角形の隆帯がめぐる。器表はヘラミガキされ、赤色塗採される。１と同様の器形になるのではなかろうか。

Ｂ類（第２１図２、３、６、第２２図３３、３２、３５）

有段口縁の細頸壺である。２は赤色塗採され、器表及び口縁内部は良くヘラミガキされている。肩部に櫛描平行文と波状文が交互に施文されている。有段口縁下端部および胴部上版部の文様の下部にはボタン状の突起が貼り付けられる。櫛描文は櫛を動かすことによって施文されている。胎土の色調は赤褐色。６は器表及び口縁内面はヘラミガキされ、赤色塗採される。有段公園下端部にボタン状の突起が貼り付けられている。胎土の色調は赤褐色。２と比較すると胴部の張りが弱く、やや長胴な器形となる。３３は口縁部のみである。ややハケ整形痕がのこるが、ヘラミガキされ、赤色塗採される。３５は有段口縁の壺



第20図　旧石器時代の石器

形土器の胴部と思われる。器形的には胴部が張る２のようになるであろう。ヘラミガキされ赤色塗採される。

Ｃ類（第２１図５）

素口縁の壺と思われる。内外面とも篦磨され、赤色塗採される。箱清水系の壺であろうか。

Ｄ類（第２２図３６）

朝顔状の有段口縁の壺である。胴部はほぼ球形であるが、幾分下反部で屈曲する。

Ｅ類（第２１図９）

小型壺で、口縁部を欠くため全形を知ることはできない。丁寧にヘラミガキされ、赤色塗採される。胎土の色調は赤褐色を呈す。

Ｆ類（第２３図３７）

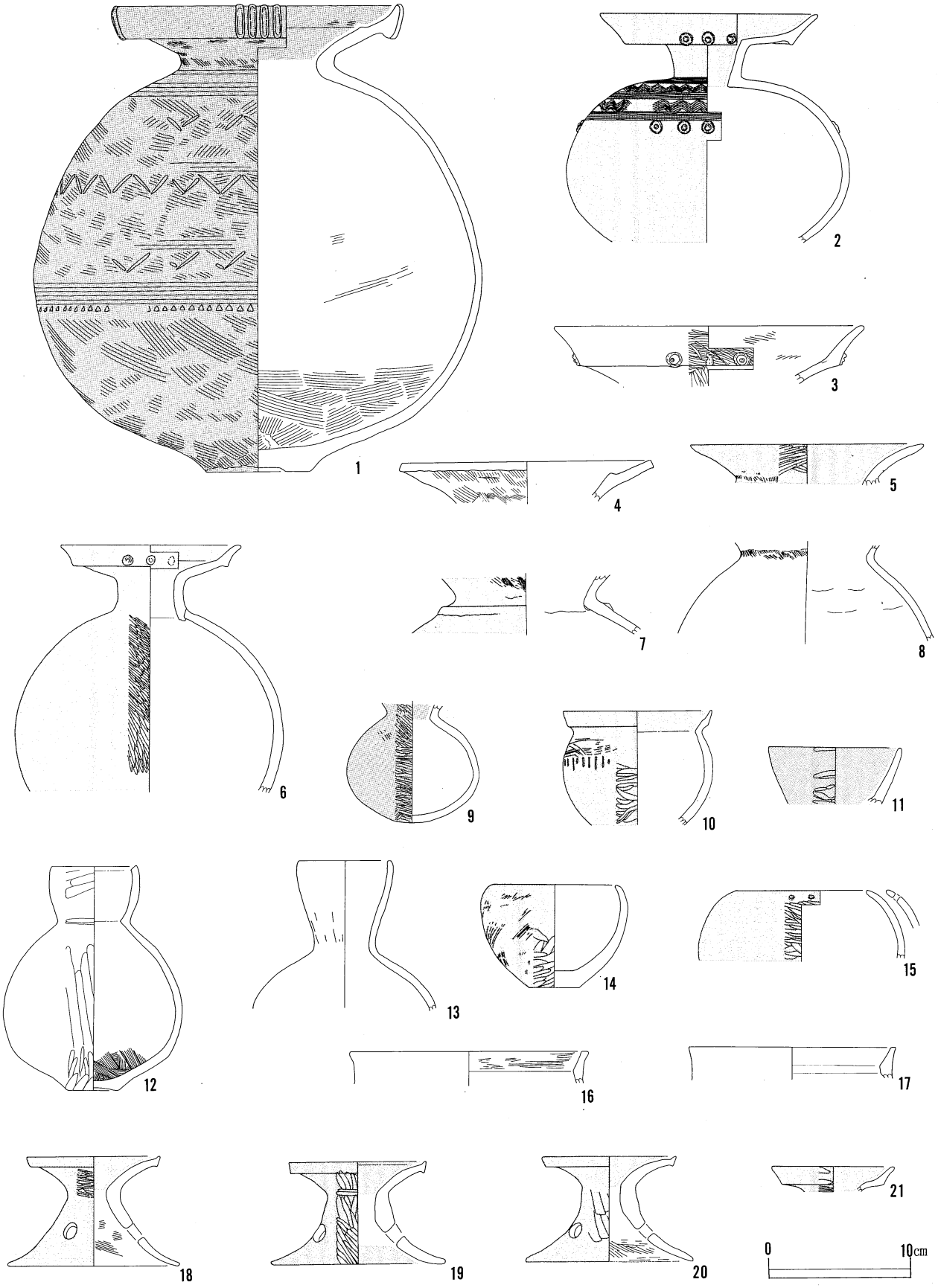
素口縁の壺形土器であろうか。

Ｇ類（第２３図４６）

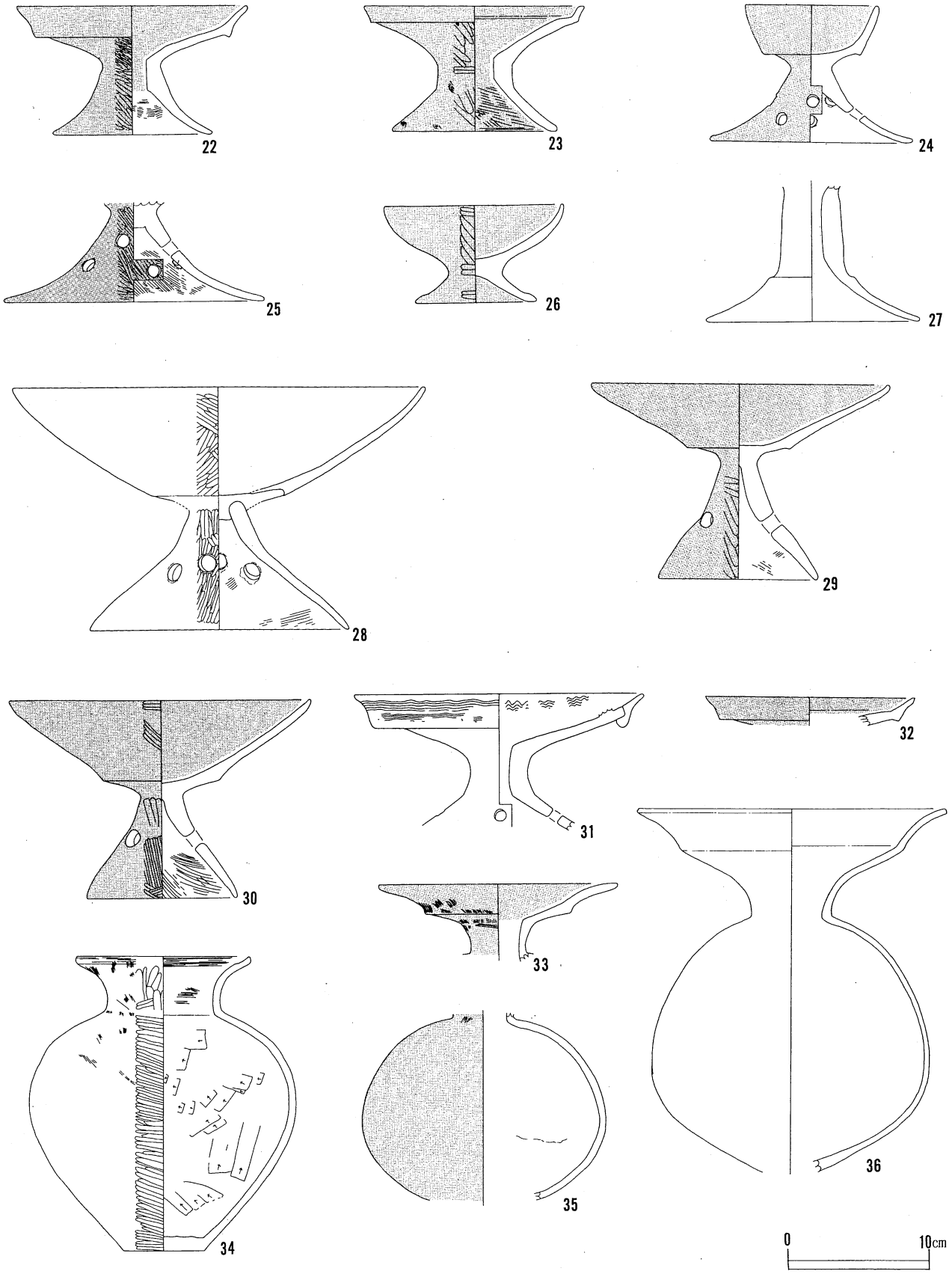
折り返し口縁の壺形土器。器表はヘラミガキされるが、細いハケ整形痕が残る。色調は黄褐色。

Ｈ類（第２１図１２から１３）

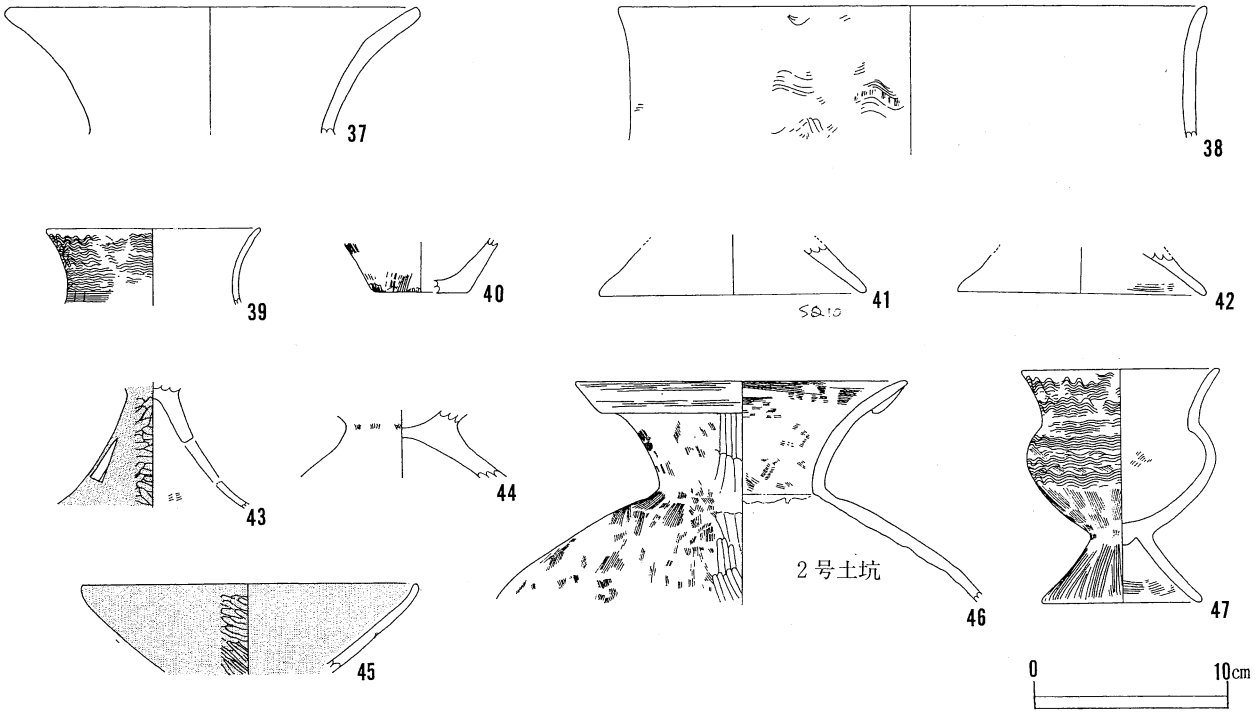
ひさご壺である。１２はやや内湾する口縁部をもち、胴下反部がわずかに屈曲する。口縁端部が内側に面取りされる。胴部中位に焼成後の穿孔が認められる。口縁部は横方向、



第21図　第１号前方後方墳丘墓　遺物（１）



第22図　第１号前方後方墳丘墓　遺物（２）



第23図　第２号前方後方墳丘墓（ただし46は２号土坑）

胴部は縦方向のヘラミガキ痕が観察されるが、顕著ではない。胎土の色調は赤褐色を呈す。１３はやや内湾する長い口縁部をもつ。器表の荒れが著しく、整形痕の観察は難しい。

２　鉢（第２１図１４，１５）

内湾する鉢形土器である。篦磨きされ、赤色塗採される。１４は小型である。ハケ整形痕が残る。１５は胴下半部を欠く。器表及び内面はヘラミガキされる。内湾する鉢形土器の口縁部に部分的に赤色塗採される。

３　器台（第２１図１８～第２２図２３、３２）

１８は口縁端部がつまむようにして持ち上げられ、端部が面取りされたような形状を呈する。脚部には円形の空かしが三個認められる。器表はヘラミガキされ,赤色塗採される。胎土の色調は赤褐色を呈する。１９は１８と同様に口縁端部がつまむようにしてもちあげられ,端部が面取りされる。脚部には円形の空かしが三個認められる。１９は１８と比較すると寸詰まりな感じをうける。胎土の色調は赤褐色を呈す。２０は口縁端部が面取りされ、やや頸部が太い。脚部には三単位の穿孔がある。２１は口縁端部の引き出しが長い。２１

は器台の受け口である。脚部を欠く。口縁は特に面取りすることはない。２２は受け口部が大きく開き、外反する段をつくってたちあがる。器表はヘラミガキされ、赤色に塗採される。２３は受口部が大きく開き、強いヨコナデで端部が引きだされる。全面ヘラミガキされ、赤色塗採される。

4　高杯（第２１図１１、第２２図２４～３０、第２３図４１～４５）

１１は小型高杯の杯部であろう。全面ヘラミガキされ赤色塗採される。２４は小型杯部をもち、脚部が大きく開く高杯。器表全面はヘラミガキされ、赤色塗採されている。脚部中段の計六個の円形空かしが認められ、上方から見ると三角形に配置されている。胎土の色調は赤褐色を呈す。２５は高杯の脚部と思われる。杯部は２４の例のように小型のものだと推測される。脚部は大きく開き、六個の円形空かしが認められる。ヘラミガキされ、赤色塗採される。胎土の色調は赤褐色を呈する。２６は脚部の短い小型高杯。杯部は内湾して立ち上がる。ヘラミガキされ、赤色塗採される。胎土の色調は赤褐色を呈す。２７は筒状の脚部をもつ高杯である。脚部のみで全形を知り得ない。胎土の色調は黄褐色を呈する。

２８はやや大型の高杯で、杯部は脚部接合点から内湾気味にひらく。脚部は杯部との接合点から最初は外反気味に開き、その後やや内湾気味に開く。杯部にわずかに稜を形成する。器表はヘラミガキされるが、他の例のように赤色塗採はされない。胎土の色調は黄褐色を呈し、他の高杯とは異なる。２９は有段の高杯である。杯部は脚部の接合点から横にややはりだし、稜を形成して立ちあがる。脚部は緩やかに内湾しながら開く。器表はヘラミガキされ、赤色塗採される。胎土は赤褐色。３０は有段をもつ高杯で、器表はヘラミガキされ、赤色塗採されている。杯部は脚部との接合点から横に張りだし、稜をつくって、開く。胎土の色調は赤褐色。４５は高杯の杯部、赤色塗採される。

5　甕（第２２図３４、第２３図３８，３９，４７）

A類（第２３図３８，３９，４７）

箱清水式の甕である。３８は大型で、櫛描波状文が施文される。３９は頸部に簾状文がめぐり、波状文が施文される。４７は箱清水系の台付甕。口縁部が外反し、屈折点をもって胴部にいたり、胴部は肩をもつ。口縁部及び胴部には櫛描波状文が施文される。櫛描波状文の下にはハケ整形痕がのこり、脚部にも認める。

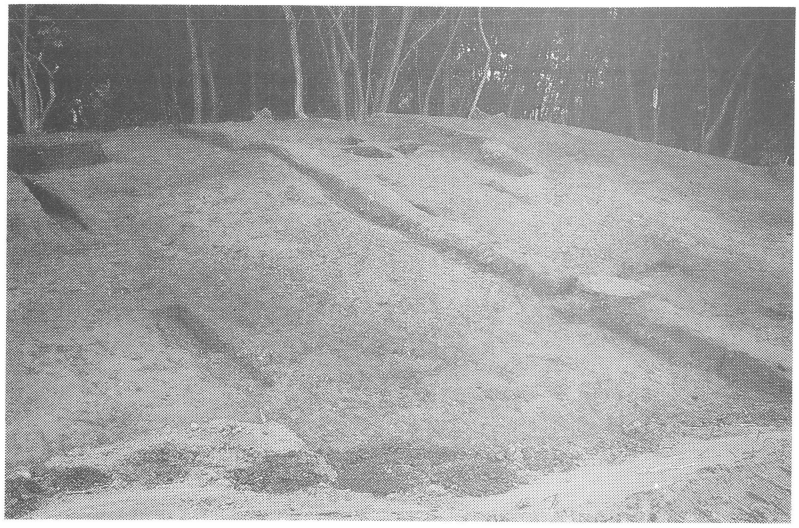
B類（第２１図１０）

受け口状の口縁をもつ甕である。ハケ整形され、ヘラミガキされ、赤色塗採される。赤色塗採は口縁部の内面に及ぶ。ハケ整形痕がわずかに残る。胴上半部に刺突文が施文され

る。刺突工具は鋭いヘラと思われる。

C類（第２２図３４）

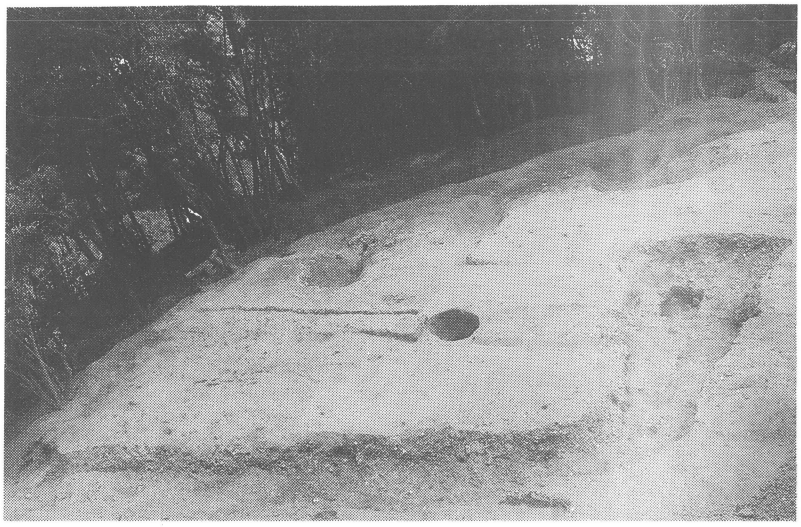
「コ」の字状の口縁をもつ甕形土器である。口縁端部内側及び端部に目の細かいハケ整形が行われ、端部の面取りがなされている。器表はヘラミガキされている。胴部内面はヘラケズリの痕跡が認められる。



第１号墳検出状況・北側より

第１号墳周溝部分・北側より

第１号墳　２号墳周溝切り合い部分・南側より



第１号墳全景・北側より
（南西側は周溝は林の中）

第１号墳南西側周溝内遺物
検出状況・南東側より

〃　　上と同じ

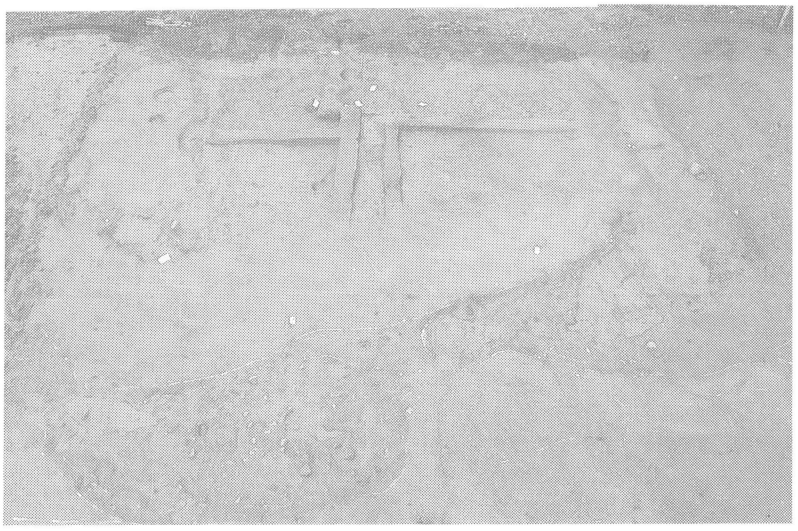
第１号土坑、２号土坑
調査状況・西西南側より

第１号土坑

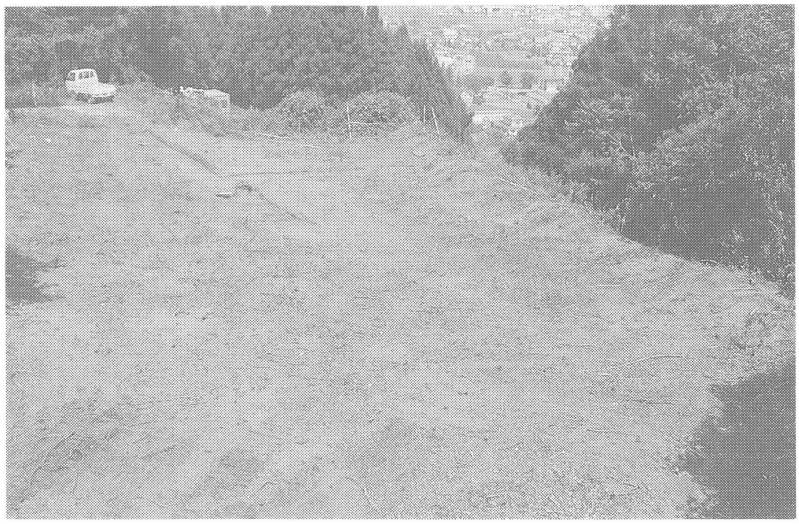
第２号土坑内
遺物検出状況

第２号土坑

第２号墳　検出状況全景
・北北西側より



第２号墳　全景
・北北西側より



１号土塁と調査区全景
・西側より

４号セクション・東東北側より
（１号土塁）

１号土塁、２号土塁と調
査区全景・東北側より

長野県中野市
安源寺城跡遺跡発掘調査報告書

印　　刷　平成11年３月19日
発　行　日　平成11年３月31日
編集・発行　中野市教育委員会
　　中野市三好町一丁目３番19号
印　刷　所　㈲高錦堂印刷所